「森の夢」（2）取材ノート

レジストロ、桂植民地

醍醐麻沙夫
菅沼東洋司　画

連載第1回

第一章

私が泊っていた宿の部屋からは、窄い海と、その向うに視界一杯に延びた砂丘のような島が見えた。左手の窓の中央には丘が見え、頂上に白いキリスト像がだっていた。窓ガラスの大半は割れているが、残っている安ガラスのために風景は処々ひどくゆがんでいた。

丘に登ってみょうと思い、私は暗い階段を降りた。外に出ると、陽光を反射して道はまぶしい。暦の上では春だが、暑かった。私はすぐ汗をかきながら歩いた。小さな白魚が道端に落ちて乾いている。こびり付いている砂が白く輝いて、塩の結晶のように見えた。イグアッペは塩湖の跡に組まれたような町だった。

丘に向って進むと、道はすぐ海辺になった。真水が多いために池のような感じの、静かな内海である。芦がま

ばらに水中に立っている。盈溢する陽光に倦んだ芦の群れはひそかな風にも敏感にふるえていたが、強い風にゆらめいて水の反映に身を紛らわすとたちまち瀟洒な魚影と化して水上を走り去るように見えた。水のきらめきをぬってその影は遠く放たれたようなのに、風がおさまるといつのまにか元の葉にかえって私の目を欺いた。

魚加工場の廃墟をすぎると、赤錆びた大きな船が見えた。河川用二階建ての美しい型の船である。私は柵の前で立ち止まって船を眺めた。

柵と船の間には白い和蘭陀海芋の花が一面に咲いていて、船は触先の下部を花に埋めていた。

柵には低い木戸がついている。輪になった針金を外して木戸を押すとかすかに軌った。

草の中に漁師が踏みならした細い径がついている。径にはそこになじんだ素足が自然につけた優しさがあった。

私は近ずいて、あらためて廃船を眺めた。

赤錆びて、三〇米くらいあった。後部の中央に水輪を取りはずした大きな切り込みがあって、うす暗く海面がのぞいていた。外の光線を反映して油のようにトロトロと光っている。

河口のこの町からレジストロやジュキアへ河を遡る船だったが、

バスやトラックが通るようになって廃棄されたのであろう。座礁させてあった。数多くの日本人移民をも運んだ筈だった。ブラジル移民がはじまった直後といっていいほどの初期から、この地方に日本人が入っている。いろいろな日本人たちが様々な用件でこの船に乗ってリベイラ河を上下したにちがいない。

この船は多くのことを知っている……と私は思った。それを訊ねるような気持で私は船を眺めていた。小波が舷側にあたって微かな誘うような音を立てたが、船は沈鬱に鎮まっていた。

私は何枚かの厚坂を渡しただけの舟着場から廃船の腐りかけた甲板に飛び移った。

（連載2回目）

（1）

後部は傷みがひどく、手摺りはボロボロに風蝕され、甲板も腐って穴があいていたが、二階建てになった前半部はしっかりしている。海用の頑丈な船とちがって、華奢で優美な感じはまだ残っていた。内部の天井は低く小さな窓や扉は記憶の世界に迷い込んだような印象を与えた。

私は狭い博段を登って二階へ上がった。ドアや窓ガラス、屋根などははずされていた。一等船室だったらしい洒落た感じの小部屋に入り、造りつけのベンチに坐って

煙草に火を点けた。
煙草の煙りは狭い空間をゆっくり這いまわり、白い生きもののように動いた。板に近ずくと、煙は行き場に迷ってもつれた。煙の塊のなかにそれぞれの力があって、未練がましくお互いに引き合いながらも崩れ、分散し、薄れていった。
静かだった。
丸い窓枠に区切られた内海と島が、小さな絵のように小部屋に掛っている。海水浴客を乗せたフェリー・ボートが島へ渡って行くのが見えた。
弱い波の音にまじって足音が聞こえた。立ち上って窓から見下ろすと、舟着場の端に女が立っていた。黒人の血が濃く、褐色のすべすべと光った肌をしていた。顔見知りの女だった。
私が手を振ると女も笑って手をふった。
「散歩？」
私は船から降りると、女に訊ねた。
「あの丘に登ってみようと思って……。一緒に行かないか？」
彼女はうなずいた。
私たちは白い海芋の径を戻り、丘へ向って歩きだした。
彼女は叔母の家へ遊びに来ている。叔母の家は文房具を

主にした雑貨店で、彼女も店を手伝っていた。その店は宿の近くだったし、私がこの町に来るとき、彼女も同じバスだった。よそ者同志の気安さで、私たちは会えば一言、ふた言は話をするようになっていた。イヴォーネという名だった。

私たちはすぐ丘の麓についた。低い丘にみえたが登りはじめるとかなりの急坂だった。

曲った道に沿って登り海に面すると、断崖が落ちこんでいて、丘全体が岬になっているのが分った。島と外洋が遥か遠くまで眺められた。「長い島」イリヤ・コンプリーダは岬の左側の小さな入江の沖合いから始まり、右手に延び、七五キロの長さにわたって内海と外洋を隔てている。

小さな入江には大西洋のうねりが押し寄せていて、右手の瀞かな内海と鮮やかな対照をみせた。入江に風が渡ると、うねりの表面には細かい皺がよって、海は巨大な象のごわごわした皮膚のようになった。

連載第３回

（１）

私たちは海を背にしてキリスト像の立つ平坦地まで登った。像の正面にまわるとイグアッペが足元に見えた。千二百戸の町がボン・ジェズス・デ・イグアッペ教会を囲んでひっそりと広がり、そのまわりには幾筋もの水路がすてられた鏡の破片のはように頻繁に光っていた。

私とイヴォーネは草の上に坐って町を見た。私は手をのばして彼女の手に重ねた。私と同様に彼女のシャツもひどく汗で濡れていた。

『暑いなぁ』

「疲れた。でも一度登ってみたいと思ってたの。いい眺めね』

『汗をかいただけのことはあった、という訳だ』

『そう』

私は彼女のブルージンの膝に手をおきながら、景色を眺めていた。中心の教会が群をぬいて立派な建物だった。御神体はサンタ・イマージェン・ド・セニョール・ボン・ジェズスである。一六四七年に海賊船に襲われたポルトガル船よりこの近くに漂着し、二人の漁夫によって発見されたと言い伝えられている。二百年ほどのあいだ、聖体は聖父ネーベス教会に併祀されて漁師の守護神として信仰されていたが、数多くの奇跡を顕わしたので、ジオゴ・ロドリゲス神父時代に七十年の歳月を費して現在の教会が完成した。一八五六年のことである。完成した八月六日を中心に毎年大祭があるが、十万

人もの人々が集まる。私が泊っている
民宿もそのときは参詣人で超満員になるそうだ。
東京シンジケート代表の青柳郁太郎が移民の入植地を物色しながら初めてイグアッペを訪れた明治四四年にも、それから三年後の大正二年に三十家族の日本人入植者がサントスから船にゆられて着いたときにも、この教会は今とまったく同じ姿でそびえていたにちがいない。
その日以後、実に多くの移民たちがリベイラ河の沿岸に入った。私が探しているKという男もその一人だった。
私はKという男を探して旅をしている……と書くとや感傷的になるがこの地方の移民の辿った道を調べながら、できたらKの消息を知りたいと思っているのだ。
明日はイグァッペを切り上げで、上流のジプブーラ、かっての桂植民地を訪ねたいと思って、私は視線をリベイラ河の上流へ移した。
青くかすみがかかったように遠くははボヤけて、ジプブーラを視界に収めることはできなかった。
風の向きが変わって、女の汗のにおいが強くにおった。私にKのことを語ってくれた田端邦三はKと彼とのあいだに存在した或る女の神秘的な体臭についてしばしばふれた。
＜こんなにおいだったのだろうか？＞。　私は思って、イヴォーネを見た。
『……？』
彼女はいぶかしそうにこちらを見た。

私はたわむれに唇を近ずけた。彼女は避けなかった。女はしばしば、戯れのキスなら許してくれる。

連載第四回

（1）

彼女は卵型の顔をして撫肩なので、輪郭だけをいえばモジリアーニの描いた女に似ている。

私は間近く女の顔を見た。目は大きく丸い。黒く耀いて美しい眸だった。僅かな白眼が青みがかり睫毛は長く反っている。唇が合うと女は目をとじた。

厚ぼったい唇に貞操のように汗の塩がまといついていた。塩がとけて唇の甘味が増すにつれて、女の唇はふっくらした厚みになり、粘膜になってうごめいた。その柔かさは深い悦楽へ男を誘おうとしているようだった。それは毒のようなものになって私のうちに沁みてふくらんでいった。

私は夢中になって女を押したおすと、背中に焼けつく太陽の重みを感じながら、その胸の弾力をさぐろうとした。

彼女が首をを振って私を押しもどしたので、私は冷静にもどった。いつのまにか、夢中になりかけていた。
私は彼女の背中の草を払ってから、立ち上った。
『帰ろう』
『ええ』
坂を降りながらも、腹の中に火が点っているような感じが消えなかつた。
（これが、この土地の女の味か）
と思った。
イヴォーネもいまこそ都会に住んでいるが、ここの生まれだという。若かったころの田畑やKたちにとって、河辺や開墾地で行き会う褐色の肌をした娘たちがどんな意味をもった存在だったか知りたいと思っていた。
私は彼女の手をとって歩きながら、
『君が欲しくなった』
と言ってみた。
彼女は聞えない振りをしてたが、もう一度言うとチョッ、チョッと舌を鳴らした。
『此処じゃないんだ』
もう冗談になって、
『山にはボラシュード（ブヨ）が多いからね』
『どこだってダメよ』
彼女も笑いながら首を振った。
目の下に柳沢家の別宅が見える。隠居所に建てたというが、本宅より大きい。美しい庭が屋根ごしに見えた。腕

時計をみると、そろそろ約束の時間だつた。昨日もあの家に行って入植当時の話をきいた。

私の足がおくれたのでイヴォーネは五メートルほど先を歩いている。細く胴がくびれて、女王蜂のように尻がふくらんでいた。その魅惑的な動きを目で追いながらも、やはり、彼女の後を追いまわすのはあきらめて、約束の時間通り柳沢家を訪ねることにした。

明日は上流のジプブーラへ行く予定なのだ。上流へ行ったら、もっと「森の娘」らしい女に逢えるかもしれない、と身勝手なことを夢想しながら、イヴォーネの後ろ姿を追っていた視線を、青くかすんだリベイラ河上流へと移したのだった。

連載第五回

（1）

翌朝、私は宿を引き払い、フェリーボートで対岸に渡った。河岸に漁師の家が並んでいる。

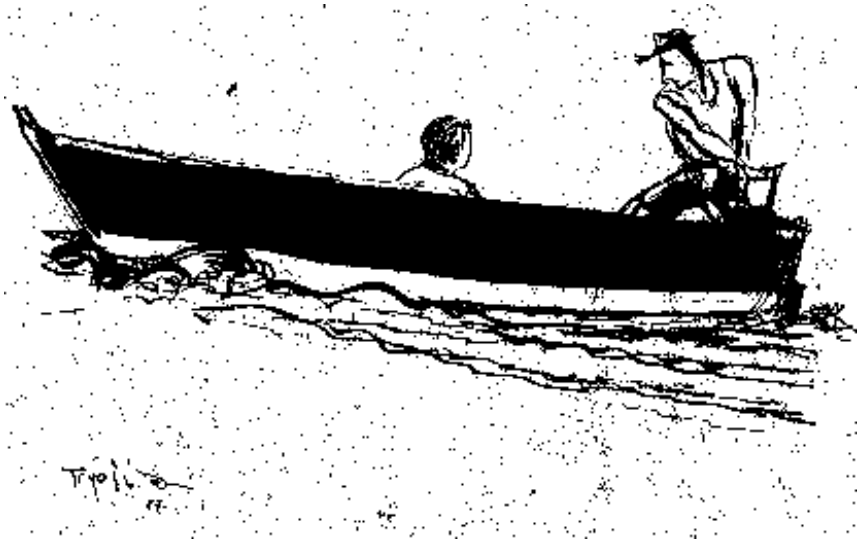
昨日予約をしておいたので・一人の漁師が私を待っていた。私を乗せたモーターボートはすぐ岸をはなれた。

小さな舟から眺めるどイグアッペの風景は、河岸の赤棟瓦の倉庫と教会の塔しか見えない。

ここらの漁師はスズキ釣りを主にしている。複雑な水路の気水帯を持ち、餌になるエビもマンジューバも豊富だから、この辺は理想的なスズキ釣り場なのだ。

私が釣況を訊ねるとエシジンのハンドルを握りながら

漁師のジョンは首をふった。
「プロもアマチュアも皆モーター船で釣りまわるようになったからね。魚が寄り付かない。できるだけ遠くへ行かんと釣れなくなった」
魚も野生動物だからモーターの騒音などは嫌う。
「どのくらい遠くへ？」
「まあ、最低二十キロくらいは遠出しないと」
船外機の小舟で二十キロは遠い。漁師の守護神をかかえたイグアッペで魚が釣れないとは妙ではないか、と私が言うと、
「我が家の聖人（サント）は奇跡を顕わさず、さ」
とジョンは苦笑した。
舟は岸添いにかなりのスピードで流れを遡っている。どこから流れてくるかと思うほどの水草のなかを進んだ。町が遠くなり、岸辺の水生植物の中に沈み、高い二基の鐘楼だけが白く輝いて蜃気楼のように浮んでいる。この流れはバーラ・グランデとよばれる運河でリベイラ本流ではないが三百メートルほどの幅をもつ堂々とした河相である。一八三七年の開削だというから教会の工事中の頃である。単なる洪水防止よ



りも水路としての重要性があったのだろう。記録によると、はじめは細い水路にすぎなかったそうだ。それが一五〇年のうちにこんな広い河になった。増水期に必要な水が流れる広さを河は勝手にけづりとったのだろうと思われる。

やがて、本流との合流点にでた。北上していた舟はこんどは西へ向う。

沼のような水路があちこちにあって、葦の間に白サギの群が見えた。岸辺に小屋があって女が洗濯をしている。マンジューバの網を張っているカヌーが岸近くに浮いていた

ずっと以前・四っ手網でマンジューバを捕っているのを見た記憶がある。網を上げると白い魚体か遠目にもキラキラ躍ねているのが見えた。男がタモを動かすと白い魚体はかき消すように見えなくなる。男が夢の破片でも集めているような風景だった

「マンジューバがとれるのかい」

「まだ早いが、そろそろ時期だ」

ジョンは答えた。

ワカサギそっくりの魚で、海から遡ってくるのだが、どういう訳かリベイラ河にしか産しない。

連載第六回

（1）

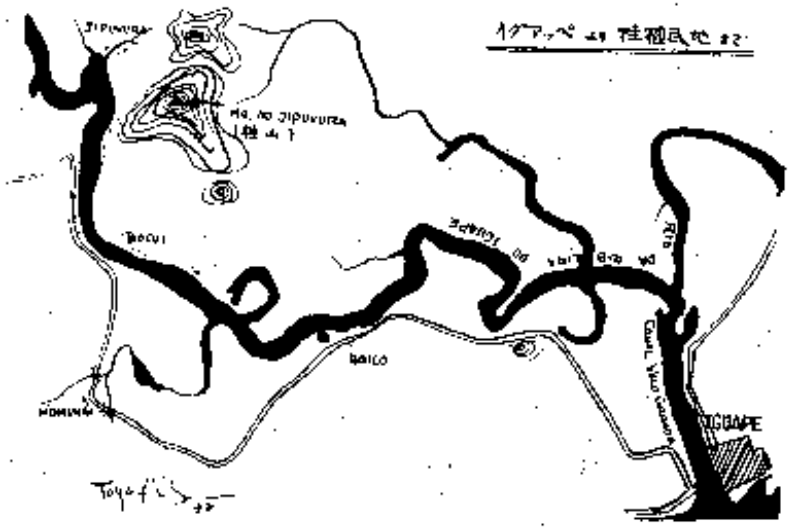
イグアッペから桂植民地のあったジプブーラまでは直

線距離にしたら十三キロほどだが、河を遡上すると二十キロくらいだろう。

バスチニョ、バイコ、ボカイと数軒ずつ小屋が散在する里を過ぎて、ふたたび河が北へ向くと行手にちょっとした丘というか山が見える。

海抜たった二百八メートルだから、丘だと言ってしまえばそれまでだが周りが海抜五、六メートルにすぎない平らな草原の中では突如とした森の高みはかなりの偉容がある。

桂植民地華やかなりし頃はこの丘は『桂山』と呼ばれていたので、それに敬意を表して私も以後『桂山』と呼ぶが、たいした山ではないことを断っておかなければならない。



桂植民地の青年会の歌である『桂青年の歌』は、〈緑したたる南聖の、仰げば高し桂山〉で始まっているが、〈緑したたる〉はまあいいとして〈仰げば高し〉とは大きく出たものだ。

山頂の中心点から二キロメートル離れて山を眺めたとすると、その仰角は二十メートルの木を百メートル離れた地点から眺めるのと同じことになる。グラフ用紙に縮図を描い

てみると一目瞭然だが、とても＜仰げば高し＞どころではなく視線はほぼ水平に近いのだ。

しかし、『桂山』は河岸にあってすぐ目に入るからまだ良いようなもので、上流のレジストロ植民地には『レジストロ富士』というもっと立派な名の山がある。レジストロへ行った私はその山を一目見ておかなければならないと思って探したが町の中から山などまるで見えず結局ホテルの二階の窓から爪先立ちしてそれらしいものをチラと見ただけだった。

〝山紫水明〟という言葉や〝兎追いしかの山、小鮒つりしかの川〟という唱歌が示すように、日本人にとって山と川は付きものだから、大正期にここに入った入植者たちもちょっとした丘を格上げしてリベイラ河と同格の存在に引き上げて眺めたのだ。それが自然に対する伝統的な審美眼であり故郷の風物と同じものがブラジルにも存在するという安堵でもあったに違いない。

ジョンの小舟はどんどんジプブーラに近ずいて行く。笠戸丸移民の只野さんの家の前を過ぎ、柳沢パウロさんの家が見えてきた。

それにしても＜仰げば高し桂山＞とはちょっと言い過ぎではないかと、私は行手を眺めながら、まだ、こだわっている。

現実に存在している丘を描写しようとした気配は全然なく、いきなり日本の慣用句をそのまま使っている。その辺に、良かれ悪しかれ初期移民の思考と行動を解く鍵

がありそうである。

連載第７回

（１）

柳沢さんの家の前には数隻のカヌーがもやってある。道路は河の反対側にしかないので、どこに行くにも舟がいるのだ。

車で来ると、反対側に車を停めクラクションを鳴らす。家の中から人が現われると、こちらの用件を述べる。そうすると舟で迎えに来てくれるのだが、河幅は二百メートル近くある。

初めて柳沢家を訪れたとき、私は河岸に立ち、対岸に豆粒のように見えるパウロさんに向って、

「私はサンパウロに住んで、小説など書いて生活をしている某という者でありますが、今日ここに来たのは……』

などと自己紹介をしたが、合戦の名乗りをあげているようで照れ臭かった。都会にとじ籠って、文章をいじくっていることなどは、なるべく小さな声でうつむきながら告げたいものだ。

しかし、私は自然の中を歩き回わることが多いので、

水の上では声が良く透ることを知っていたから、さほど酷い大声をあげずにすんだ。
日本から来たＴＶディレクターの佐藤という人はこの少し下流に住む笠戸丸移民の只野利助未亡人をインタビューに行って対岸の人影に向つて、
『アノーッ、私ワア、テレビノォッ、佐藤という者ですがァ』
と、あらんかぎりの大声でワメいたら、対岸から、
『そんなにおめかんともよう聞えます』
と老婆の平静な声が返ってガックリしたという。
『本当ですかア。聞えますかア』
まだ半信半疑で初めより小さな声で叫んだら、
『普通に話してください』
と言われた。
静かな河面は人声を驚くほど遠くまで伝えるのだ。朝や夕方の風のないときなら、小声で悪口を言うと、二百メートル向うにハッキリ聴える可能性がある。私は以前、森の小径を歩いていて、間近かにいるような若い女の声を聞いておどろいたことがあった。四辺にはその細道しかなく、近くに人ほいないはずなのに、声だけがすぐ近くに聞えるのだった。二十メートルほど進むと川があった。女の声はどこか離れた処から河面を伝わって私の耳にとどいたのだった。
森の中で河は伝声管のような役割りをしている。そして、その声はひどく豊かで美しく響いていた　その声に

恋してしまうほど官能的でもあった。むんむんする草いきれの中に立止って、私は暫くその声に耳を傾けていたのだった。だから、女の美しい声が船人をまねき寄せるというローレライの伝説なども、水の性質をよく知っている船人たちから生まれた話として私は不思議なことには思えない。

連載第８回

（１）

舟は岸に着いた。私は礼を言い、代金を払うと荷物を持って陸へ上った。

『こんど釣りに来な。案内してやる』

ジョンはボートをＵターンしながら言った。

『大きなのを釣るとしたらいつがいい？』

『そうだな。小潮のときがいい。小潮の下げ三分が狙いどきだ』

スロットをひねると薄い紫色の煙が立って、ボートはみるみる遠ざかった。

『又、来ましたね』

ゴム長をはいたパウロさんが後に立っていた。

『気のせいか、前に来たときより庭が狭くなったようですね』

『ああ、河が毎年こちらへ寄ってくるから』

家は日本風の二階屋である。昔の写真を見ると庭が広々としている。今は河っぷちに家が建っているような

感じだった。四、五十メートルは浸食されたはずである。
　こんな河辺に小さな土地を買いたいと思うときもあるが、私が買えるていどでは四、五十メートルもけずられたら無くなってしまう。
『もう少し河が寄ったら来年あたり家を移さなければと思ってるが、もしかしたら河筋が変るかもしれない』
　パウロさんは上流を指した。
『あの辺が浅くなっているから、流れが曲って対岸へぶつかるようになるかもしれないな』
『そうすると、家の前にどんどん土地が増える訳ですね』
『ウフフ』
　と彼は笑った。
　家と並んでピンガ工場がある。工場も移すとなると、小規模ながら大変である。工場の裏にはサトウキビ畑が広がっている。自分の畑で作ったサトウキビでピンガを製造する。そういう仕事を桂植民地時代から一貫して続けていて「柳沢のピンガ」といえば名は通っている。商品名は「モロン・リベイラ」である。
　土間に坐ると、パウロさんは黙ってピンガをだしてくれた。何にも言わなくてのも、

それが一九五八年ものであることは私は知っている。ほとんど透明で、ごく薄くタルの木の色が出ている。

『おやじの処で飲みましたか』

とパウロさんが訊ねた。

『ええ』

と答えたが、飲んだどころか、取材だかピンガを飲みに行くのか分らないくらいだった。

『おやじのとこのピンガはいいから』

とパウロさんは笑った。あれは一九四八年ものである。ウィスキーのような色をしている。何でもその年は忙しくて、外から買ったピンガを出荷していたら自家製がそっくり余ったそうである。それで松の木でタルを作って貯蔵しておいた。新しいタルなので木の色がでた。口に含むとまろやかな味に混ってプーンと松の匂いがする。まことに逸品である。

連載9

（1）

『旨いですか』

イグアッペで柳沢老ほ私の顔を見ながら訊ねたのだった。

『ええ、それは。とても口では言えない』

老は満足そうにうなずいて、

『いいピンガはいくら飲んでも体にさわりませんよ』

と言った。

『もっと飲んでください』
『ハイ』
手酌で飲む私を老は無念そうに眺めている。八十余才で矍鑠たるものだが、一年前に二度大病をして、まだ医者から酒は止められている。
『もう一度、ピンガを飲めるようになってから死にたい、と思ってます』
老はピンガ一筋に生きてきた人だ。この三十年もののピンガも子供のように可愛いいにちがいない。三十年の色々な想い出が籠められている酒なのだ。
三十年もののピンガというと、そのこってりとした味といい、後の余情の深さといい、私には三十才の女のように思われる。そう思って、また飲む。
ピンガは強精剤であるという説がある。私が古い酒を飲みながら〈三十才の女〉……などと妄想にふけるのもそんな説に影響されてのことかもしれないが、老の元気さを見ているとその説の正しさを肯定したくなる。十五人の子福者で、孫たちまで集めるとなると数台のバスが要る。

『この人は日本人会や組合の仕事で、あまり家にはいませんでした』
と奥さんのいまさんが言った。
『でも子供たちが次々に仕事を手伝ってくれたし近くのカイサーラが物々交換でピンガを買いに来たりで、食物も楽に手に入り、さほど困らずやってこられました』
……昨日、ピンガとカラスミとカツオの干物をお土産に貰って柳沢家を辞去したのだった。そして今日は老の三男のパウロさんの処で、まだ午前中だというのに二十年ものを飲んでいる。少々後めたい想いがするのも当然だった。

連載１０

（１）

酒のあと昼食をごちそうになってから、私はパウロさんに頼んで旧桂植民地の中心地まで舟で連れていってもらった。
少し遡ると右岸に岩が見えている。流れがまともに当って深いワンドになっている。岩の回わりは陽光を反映して白いものが光っている。
貝塚の跡というので舟をつけてもらった。
『石灰工場があらかた運んだのでいくらも残ってませんがね』
確か一九三七年だったと思うが、鳥居竜蔵博士が桂植民地にある大貝塚の発掘をした。と聞いていたので、そ

れを言うとパウロさんは、
『ああ、それはスバウマのザンバッキ（貝塚）です』
と答えて、
『あっちの方です』
桂山の左方を指した。
『まだありますか』
『ありますよ』
『遠いんですか？』
『六キロくらいかな』
『行ってみたいな』
と言うと、
『今は径がないですよ。テルサード（山刀）で径を開けながら行けば、行けないことはないけど』
『そうですか』
と、私はガッカリした。
香山六郎編の『移民四十年史』などで見るスバウマ貝塚に立つ鳥居博士の写真は中折れ帽子に背広で蝶ネクタイをきちんとしめている。そんな恰好では発掘というより単なる視察に近かったのではなかったかという感じがするが、いずれにしても昭和十二年ころの桂植民地は背広にネクタイ姿でスバウマ貝塚まで行けたのだ。今は径は森に閉されてすでに久しいという。
私たちが立つ貝塚はほとんどの貝が運び去られた跡な

ので、細かい破片だけが地表に散乱しているが、全てカキの穀ばかりである。棒で土を掘ると大きな殻が埋まっていた。掌より大きな立派な殻である。
私がパウロさんの顔をみると、
『スバウマ貝塚もカキばかりです。うんと大きな殻ばかりです』
とうなずいた。
生で食べたらさぞ旨いだろうと思われる。
『昔の原住民はごちそうを食べていたんだなあ』
『そうですねえ』
『カタツムリの殻はありませんか』
『カキばかりです』
この先のカナネイアの貝塚の一つを以前に見たが、カタツムリばかりだった。そのことを言うと、
『この辺は割に最近まで海岸だったそうです。だからカキを採っていたんです』
とパウロさんは答えた。
『この辺にカタツムリはいますか？　あのマンゲの木に付いているやつ・・』
『いますよ。あまり数は多くないけど』
それは鶏卵ほどの大きさがある。試食したことがあるが、焚火に投げ込んで焼いたので灰だらけで味までは分らなかった。
『あれ食べたことありますか？』
『いや、ないなあ』

パウロさんは笑った。

連載１１

（１）

貝塚の近くに、無人の一軒家がポッンと建っている。庭の草花が異様なまでに伸び呆け、裏の竹薮が海からの風に鳴っていた。再び舟に乗る。

行手は広い湾になっていて、その奥に倉庫と数軒の家が見える。船は真っ直ぐにそこを目指した。緑の木におおわれた桂山が右手に真近く迫ってくる。

この深くえぐれた湾は流れの中心からずっと外れていて流れはゆるく反流し、水草の溜り場になっている。水草はアガペウという名で、金魚鉢に浮いでいるものと同じだが、野生だから一つ一つが大きい。岸辺の流れのない処にはコウキクサやアオウキクサが緑色のじゅうたんのように水面を埋めている。

ふりむくと、本流には流れに乗った浮草が淡い紫色の花を大事そうに直立させながら無数に降って行くのだった。あと二十キロメートルほど流れれば海に入る。塩水につかればすぐに腐って赤褐色に変色し砂浜へ打ち上げられるのだ。それを知ってか知らずか、浮草の群はただひたすらに流れて行く。いや、知っていたとしても水に浮く身はどうにもならないだろう。満潮になると河の流れが逆流するその間だけ、水草は生の時間へ向かって押し戻されるのだ。

旧桂植民地の広いワンドに浮いた水草の群れは完全に停滞している。

沖目を眺めると流れていく水草と停まっている水草の境目がハッキリついていて対照が鮮やかだった。ここが時代の流れから取り残された土地だという感傷が湧くのを押さえるのはむずかしい。

ボートがとまって上陸した地点は倉庫の前だった。遠目には立派な倉庫だが、近ずいて見ると壁は落ちかけ、全ての戸や窓は板で無残に打ちつけられている。もう長い間使用されていないのが瞭然としていた。ボートをもやったパウロさんと並んで草の径を歩き始めた。家が、何軒かある。一様に古く、のぞいてみないと人が住んでいるかどうかすら定かではない。開いた窓の奥に暗い光線を受けて中年過ぎの女性の上半身がみえた。

『ボアタルデ』

声をかけると人影は静かにうなづいた。

崩壊寸前の家が左手にある。覗いてみると中は割りにキチンとして机が並んでいた。

『今はここが学校らしいな』

パウロさんが言った。

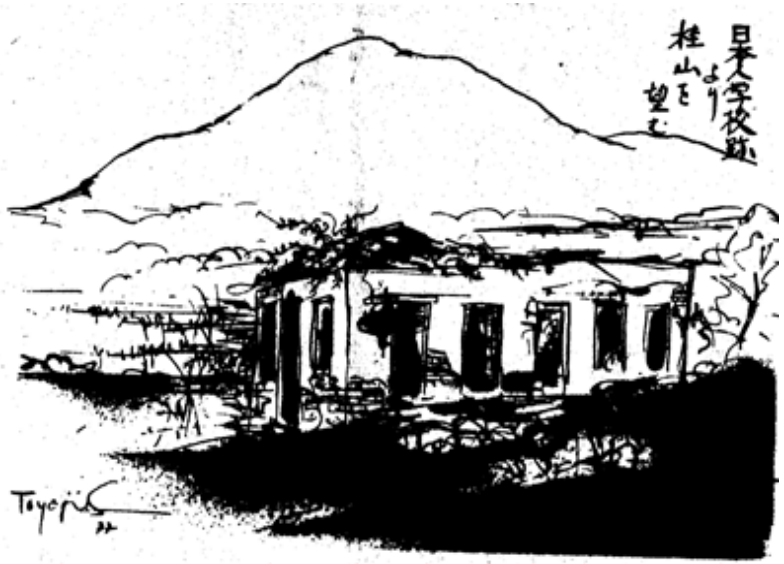
十人くらいの生徒を収容できる机の数だった。

右側にも細長い家屋がある。
『ここは青年会館だった』
あたりは無人でひっそりしているので、この建物が使われているかどうかはよく分らない。
そこから先は両側に雑木が茂っている。ダラダラと降り小川の丸木橋を渡るとちょっと上り坂になる・・。
登りきったところに露台を持った別荘のような造りの家がポッンと建っている。赤瓦の大半は崩れ落ち、壁や柱には蔦がびっしりとまとい付いた廃屋である。四辺は丈の高い草がぼうぼうと生い茂り、さながら記憶の世界へ紛れ込んだようである。
『日本人学校の跡です』
とパウロさんが言った。

連載１２

（１）

私は長靴をはいているので草の中を真っ直ぐに進んで露台に立った。蔦が執拗にからんでいて、山刀がないとそこから中に入れない。
斜めに倒れた扉の向うにかっての教室の空間がのぞいていた。
大正十四年の桂小学校の時間割りを私は知っている。



こんなである。生徒は三十二人いた。
月＝修身・算術・読方・国史。火＝読方・算術・書取・唱歌及び体操。水＝読方・算術・伯語・地理・作文（家で書く）木＝修身・読方・算術・書・論文。
月曜から土曜までほぼ同じ時間割りである。
第一時限は修身か読方だから、子供たちの本を読む声が新築の校舎から元気よく聞えたにちがいない。二時限は算術でほとんどの子供たちほ鼻の頭に汗を浮べて先生の顔を上目遣いに眺めていたのだろう。
その頃、日本人は二十五家族、百四十人いた。上流のレジストロの四百二家族二千五人に比べるとずっと少ないが、海興経営のリベイラ植民地の一環として活気があった。
露台から降りて、私たちは小径を更に登った。ひどく暑い。ムシムシして汗が信じられないほど流れる。すぐに径は終わって広い草原が行手に拡がっていた。運動場の跡だった。
…これで桂植民地の跡の見学は終わりだ。もう残っていない。入植者たちの住居の跡などを強いて見ようとすれば、山刀で径を開きながらでないと進めない。
私は立ち止まって桂山を眺めながら汗をふいた。海岸地帯の汗はハンカチくらいでは拭けないのでちゃんと手拭いを持って来た。海岸から何キロか奥に入ると植物のうんきが籠って海辺より一層汗がでるようである。
「暑い、あつい」

とパウロさんに言いながら、私は「桂青年の歌」を思い出していた。それが「緑したたる南聖の仰げば高し桂山」で始まることはすでに述べたが、二行ずつの短かい歌詞で五番までしかないのに、汗という字が三回も出てくることに気付いた。

二番目は「大和御心の民草が、溶すがごとき夏の陽も、ハゲメイソシメ吾が友よ、汗の泉は枯るるとも」となっている。

そのほかに、曰く（汗は吾等のいしずえぞ）、曰く（最後の勝は汗なるぞ）という文句がある。その他に、緑したたるとか、溶かすがごときなどという縁語を加えると、「桂青年ノ歌」は全篇これ〝汗〟の歌であると言って言い過ぎではない。

連載１３

（１）

私はこの歌が、リベイラの現実をまるで詠おうとせず祖国日本の山河に対する常套句を並べたにすぎないと文句を言ったが、こうまで暑くて酷い汗をかきながら運動場跡に佇んでいると、少なくとも常套句の選択の過程においては現実の状況が作者に強く作用した、と認めざるを得ない。とにかく汗がでるのだ。湿気が多いからベタベタする。歩いているだけでこれだけ汗をかくのだから、労働をしたらどんなかは容易に想像できる。

だから『桂青年ノ歌』を書こうとローソクの灯の下で

ペンをとった入植者の青年の頭に去来した思想は、〃ココハ暑イゾ〃　〃汗ガ出ルゾ〃ということだったにちがいない。それで一篇の歌を作った。これが当選して会歌となったのも、他の青年たちの共感を呼んだからだろう。

どんな節をつけて唄われたか知らないが、これほど汗の出る歌は類がないようだ。サウナ風呂・・・・…、ボクシング……、性交……あらゆる汗のでる場面すら連想される。しかし、例えばセックスの最中に（ハゲメイソシメ吾が友よ。汗の泉は枯れるとも）などという歌声が聞こえてきたりすると、そこには嘲笑的な響きがあってよくないのではないか？

手拭で汗を拭きながら『桂青年ノ歌』に関するそんな雑念をパウロさんに告げようとしたが昼食のピンガにまだ酔っていると思われそうなのでやめた。

その代わり、

「暑いですねえ」

と簡単に言った。

「こんなに暑くて、こんなに水があれば、米なんかいくらでも出来そうだな」

パウロさんは、

「フフフ…」
と笑った。
「誰でもそう思うのですよ。作ってみるまではね」
ヒヤッとするような事を言ってもういちど笑ってから、彼はいま来た径をもどり始めた。
「すると、あまり出来ないのですか？」
「土地によります」
「木が沢山生えていればいい土地なんでしょう」
聞きかじりでいうと、
「木の種類によります。いくら沢山茂っていてもダメな処もある」
「どんな種類の木なら良いのです？」
訊ねると、
「例えばあそこは良い。向うは悪い」
彼は森を指したが、私には同じようにしか見えなかった。どれもエルバマクコという低湿地特有の雑木がはびこってクライマックスを呈した林相に見える。
私がそう言って手近かのエルバマクコを指すと、
「それはニャカチロンです」
と彼は訂正した。
「似てるけどニャカチロンは花をつける」
パウロさんの自然に対する博学にはいつも敬服するが、初期の入植者は私と同様、木が繁茂していれば肥えた土地だ、という程度の認識しかなかったはずである。

連載１４

（１）

木を伐って米を植えさえすれば豊年満作うたがいなし、と思い込んでやって来たにちがいない。これだけの豊かな河が形成した平野であり、太陽と雨がおしみなく降りそそぐ土地は、日本人の常識からいえば米作の理想郷である。

初めてこの地を視察した東京シンジケートの青柳郁太郎ももちろんそう思ったにちがいない。

私たちは河辺へ戻りボートに乗った。今夜泊めてもらって明朝連絡船でレジストロへ遡る予定だった。仕事に戻ったパウロさんと別れて、私はひとりでカンナ畑をぶらぶら歩いた。さっき水を浴びて着換えたので、随分と涼しくなった。陽もだいぶかたむいている。

私の歩みにのれてロリーニャが幾羽も飛び立った。小型の山鳩である。丈の高いカンナ（サトウキビ）が生い茂っている。ピンガの材料だった。カンナはいちど植えれば何年でも収穫できる。最初に植えたカンナは三十年も続いていたがモザイク病がでて枯れた。今のは十年ほど

前にイギリス人から分けてもらったジャワ種だという。
ロリーニャは後から後から、まるで地から湧くように飛び立つ。
あれを焼き鳥にしたら旨いだろうな、と思った。思うだけで、鳥を獲る趣味はない。しかし、小道や空き地のあちこちに〝伏せ〟が仕掛けてあった。蔦で編んだカゴを支え木で立てて、遠くからヒモを引くだけのものである。こんな簡単な用具でも、カゴのなかに餌をまいておきさえすれば、二十羽や三十羽は訳なく獲れそうだった。自然の恵みが豊かな土地だとしみじみと思いながら私は散歩をつづけた。

この辺は不在地主が多いのが一つの特長である。誰も住んでいないので少しも発展せず、道さえ付かないとパウロさんは口惜しがっている。かって桂植民地に入植した人々はより収入の多い、より生活の便利な土地を求めてとっくに出て行ってしまったが、土地は売らないで持っている。
投資の為にはひどく分が悪い処だから、愛着があって手放す気になれないのだと思える。その愛着がどこからくるか、私には分るような気がする。水と山；…水蒸気の多い大気、山にまといつく霧。海の匂い、遡上するボラやスズキ・・日本人好みの自然がここにはあるのだ。
かといって、ふたたび此処に戻って住む気はない。かつてここを拓いた植民者たちはリベイラの自然を懐かし

いものとして心の奥にしまいながら、ブラジル全土に散って生活している。超モダンなブラジリアの街中で、私は一人の日本人に声を掛けられたことがある。その人もかってこの辺に住み、私が書いたリベイラ河の随筆を読んでひどく懐しかった、その想いを筆者に告げたかったと言った。　私がこの、いわば失敗した植民地をしばしば訪れるのも、ここほど自然と人間の関係が鮮やかに観察できる処は少ないのではないか。人間は自然を征服しなかった。居ついたわずかの人々は自然と共存できるナイーブな心を持つた人々だった。

連載15

第二章

日本人は海外に発展せざるべからず、というのが明治時代の一つのテーゼだった。

明治四十年に子爵大浦義武を中心として青柳郁太郎(いくたろう)等が、ブラジルに邦人植民地事業を興すべく研究を始めた。

この年、皇国殖民会社社長水野竜はすでにブラジルにあって、日本移民三千人を導入する契約をサンパウロ州政府と調印している。

ブラジルは遠い未知の国ではあったが、移民の適否については明治二七年農商務省参事官として中南米視察をした根本正の三百二ページにわたる詳細な報告書が存在

した。
彼はその視察旅行に三百三十四日を尽している。同じ代議士の視察でも一週間程度の駆け足が常識となってしまった今日からは想像もできない日数である。
しかし、この報告書から十三年もたった明浄四十年頃になって改めてブラジルへの移民の送出が各方面の関心を惹いたのは、杉村駐ブラジル公使が一連の視察報告書を外務省に提出し、一般にも配布されたためである。
この報告書はサンパウロ州をして日本人移民導入の適地であるとする根元報告とおなじ結論を述べているが、一面では、日露戦争の戦勝国民たる日本人がブラジルでいかに歓迎されたかという痛快な旅行記とも読みとれた。
その頃北米を横行していた黄禍論、具体的には明治三八年にカルフォルニヤ議会に提出された排日法などに暗い想いを抱いていた海外発展論者達にとっては、杉村公使の報告書群はブラジルという明るい空に目を向けさせるに十分だったのだ。
(後に実際に移民がきて、歓迎されるのは外交官だけだと気づく落差は第一部に書いた)
大浦子爵は四一年七月に第二次桂内閣に農商務大臣として入閣したので桂総理、平田内務大臣らにはかり、南米殖民事業に対し政府の方針を確立させることになった。そして青柳の名で『海外殖民製作に関する意見書』が提出されている。
ここで青柳は海外植民政策を必要とする四つの理由を

あげている。

第一は狭い国土に年々五十万人の増加をみる人口対策としてである。第二は通商貿易の隆昌を図るためには移民を南米に運べば、移住民の足賃が確保されるので航路をたすやく開くことができ、海運業発達の最も確実な基礎となる。第三は殖産興業が発達すれば海外市場が拡張する。同胞国民の居住する外国は不動にして永久なる市場となるとして、ドイツの北米、オーストラリヤ、南米に於ける例を挙げている。腋四は人口過剰に苦しむ国から労力欠乏に悩む国に移住するのは人類発達の自然的情勢だが海外殖民事業を遂行すれば国民発展の英気を振作するにおいて有効な動機となる。

連載16

（2）

それらの理由を挙げたのちに、意見書は「まず第一に政府の方針を確立するの要あらん」と述べる。外国から労働力が欲しいという申込みがあるから移民を渡航させる、という受動的態度を変えて、積極的に海外植民のた

めに必要な施設経営をしなければならないと説き　再びドイツの例を引いている。

富国強兵の国策の一環としての海外植民をドイツ式でやろう、という案は政府当局に抵抗なく受け入れられたにちがいない。警察機構も初期のフランス式からドイツ式に改められていたし、総理の桂太郎自身陸軍次官当時に陸軍兵制をドイツ式に統一した本人である。

内閣の諮問に対し、青柳はさらに具体的に詳細案を述べ、邦人入植地としてはブラジルを択ばなければならないという答申書を提出した。

桂はこれを閣議にかけ何らかの政府施策方針を打ちだそうとしたが、小村外相の強硬な反対にあい不成功に終ってしまった。

小村外相の論は、日本が国策的に南米へ植民をはじめれば米国のモンロー主義と抵触するし、ひいては日英同盟へも悪影響あり、それよりは満韓への移住に力を注ぐべしというのであった。

日露戦争を遂行できのも外交的には日英同盟の締約に負う処が大きかった。駐英大使のキャリアをもった小村外相に絶対反対されては大浦農商務大臣もいかんともしがたい。

ここで青柳たちは政府の力でブラジル植民を推めることを断念し、数名の資本家の賛同を得て企業組合を作り、その資本でブラジル植民を計画完行することにした。

この組合は「東京シンジケート」と仮称した。

「東京シンジケート」からいよいよ実地調査に派遣された青柳郁太郎は、明治四三年六月三十日に東京を出発して、まずドイツに行った。ベルリンに二ケ月近く滞在してドイツ政府の植民制度を研究し、九月十四日にリオ・デ・ジャネイロに入港した。六ケ月に且ってサンパウロ州、パラナ州、サンタ・カターリーナ州、リオ・グランデ・ド・スール州を視察した。全てサンパウロ州以南の州でドイツ系移民の多い処である。なかでもサンタ・カタリーナ州のブルメナウやジョインビレはすでに六十年の歴史をもち活気を呈していた。

青柳はサンパウロ州のリベイラ河辺に日本人植民地の白羽の矢を立て、州政府と交渉すべくサンパウロ市グランデ・ホテルに腰を落着けた。

連載１７

（２）

青柳郁太郎（いくたろう）は慶応三年、即ち明治元年の生れだから、ブラジルに来たときは満四十三才だった。千葉の堀田藩の侍医の家に生れ、カリフォルニヤ大学

を卒業した。北米にあって二六才のときに自費でペルーの農場を視察している。日本人の海外移住について若い頃から関心を抱いたにちがいない。二八才のときには榎本武揚の推薦をうけてマレー視察団にも参加した。そういう断片的なこと以外には、彼の経歴はこの原稿を書いている時点では一切不明である。

ブラジルに来る前に四十二才までどんな地位にいた人物か分らない。桂太郎ー大浦兼武ー青柳郁太郎という線は一応引けるが、青柳が官界に身を置いていたか民間人であったかも判然としないし、榎本武揚との結び付きも不明である。私の想像では、カルフォルニヤ大学時代にサンフランシスコ領事館あたりを通じて海外発展有志の若者として外相時代の榎本に名を知られたのではないか。そうすると先に述べた根本正ともアメリカで会っているかもしれない。

いずれにせよ青柳はサン・パウロ州政府と長期の交渉の結果、東京シンジケートはリベイラ河畔に官有地五万ヘクタールの無償譲渡を受けた。

まず州議会を通過し、官報に公布され、それに基いて『イグアッペ郡に日本人植民地設立のためサンパウロ州政府及東京シンジケート間に調印せ

る契約書』が州知事と農工商務長官と青柳郁太郎によって調印された。

これは全部で二十二条からなる契約書だが、州政府は州有未墾地五万ヘクタールを無償譲与するが、東京シンジケート側は一ヶ年以内に少くとも百家族を定住させ、四年後に占有されない土地は州に返還する義務があった。

二十五ヘクタール単位の分画であるから、満植するには二千家族の定住する意志のある日本農民を地球の反対側から遥々連れて来なければならない。大事業であった。

なお、条文にはポスト・ド・レジストロと称する場所に市街を建設するために五十ヘクタールの地積を東京シンジケートに譲与する一項がある。そこが植民地の本部になる予定であった。

リベイラ河上流一帯は砂金の産地として知られていた。ポスト・ド・レジストロ（登録所）という名称は産出した砂金の登録所があったためである。

連載１８

（２）

この契約書を手に青柳は帰国し、東京シンジケートに報告をすると共にこの大事業に相応する資金を有する会社の設立を提案した。

五万五十ヘクタールの土地を入植者に売れば一応の利益にはなる。移住民輸送にともなう特典もある。そうは言ってもその実行が困難なことは誰の目にも明らかだか

ら出資者はなかなかいなかった。　四五年の二月に第三次桂内閣が成立したので桂の肝煎で渋沢栄一郎、高橋是清ら三十余名を外務大臣官邸に集めて、ようやく会社設立委員ができた。このときは桂が日本民族海外発展の演説をぶって、拍手した人々の肩を叩きながら強引に署名させてしまったらしい。

こうして、大正二年三月十日、東京商工会議所に於て、資本金百万円の『ブラジル拓植株式会社』が設立され、酒井忠亮が取締役会長、川田鷹が専務取締役に就任したのである。

青柳郁太郎は新会社の専務役となったが、すぐブラジルに出発した。新会社の営発許可取得、それにともなう保証金の供託などすべての手続が契約書に定められた期間より遅れていた。様々な出願、手続もおわり、とにかく八月にはサンパウロ州政府と東京シンジケートの植民契約をブラジル拓植株式会社が継承する正式な認可を得た。

四人の職員も日本から到着し、すでにブラジルで採用された藤田克己を加えてレジストロへ向った。

藤田は盛岡高等農林学校の出身で、アルゼンチンの伊藤清蔵農林博士の農場へ行き、

その後ブラジルへ来た。あちこち流れ歩き、マット・グロッソ州の鉄道工夫などした。そこで香山六郎などにも会っている。鉄道工夫をやめてサンパウロ市へもどって視察に来た青柳と知り合い、彼の秘書兼通訳の仕事をしたようである。

藤田に連れられて、四人の職員はサントスから海路レジストロへ向い、青柳はサンパウロに拓植会社の出張所を開けた。

こうして、ブラジル拓植株式会社の手によってイグアッペ植民地の創建が始まったのだった。

この植民地は三つの意図に支えられていた。第一はビスマルクの富国強兵国策の一環としての経済植民政策を日本も実施しようとした点である。

連載１９

（２）

第二は日本の食糧基地としての可能性の線上で米作を目指したこと、第三は出稼ぎの「移民」ではなく、定住する「移住民」をもって構成しようとしたことである。

この三つの意図がイグアッペ植民地の初期形成を方向づけていたのだが東京シンジケート（ひいてはブラジル拓植株式会社）を創った桂太郎ー大浦兼武ー青柳郁太郎という人脈の一人一人にやや図式的ではあるが、三つの意図をふり分けることができると思う。

第一のドイツ式経済植民政策は総理としての桂太郎の

ものである。
第二の「米作」は東京シンジケート成立当時農商務大臣だった大浦兼武の要請であった。食糧問題の中心は米であり、大量の米を輸入に頼っていた当局にとって海外に邦人による安定した米の供給地を確保するのが急務と感じられた。
青柳が州政府と土地払下げの交渉中、移民を一年間コーヒー園に就労させれば多くの点で有利である、という州側の示唆に頭を振ったのも「米作移住民」という日本側の確固たる意図があった為と思われる。
第三の定住する移住民という意図は第二者と不離であるが、より一層青柳郁太郎の信念であったろう。その信念は二十代のカルフォニヤ時代に、根なし草の出稼ぎ邦人の生活を見聞しているうちに培われたにちがいない。そして榎本武揚やその周辺の人々と接触することによって、より強い信念になった。
しかし、北米が邦人の定住の適地とは思われなかったらしい。メキシコもしかり、初期移民が排斥されたペルーもしかり・ブラジルに於て彼は初めて、日本人が社会的な抵抗なしに農場主となって定住できる可能性を見出したといえる。
これら三つの意図を実現すべくブラジル拓植組合が作られたが、最初から利潤を得られる性質の事業ではないとしながらも、株式会社であれば事業が軌道にのれば利益をあげ配当を出さなければならないのは当然であるが、

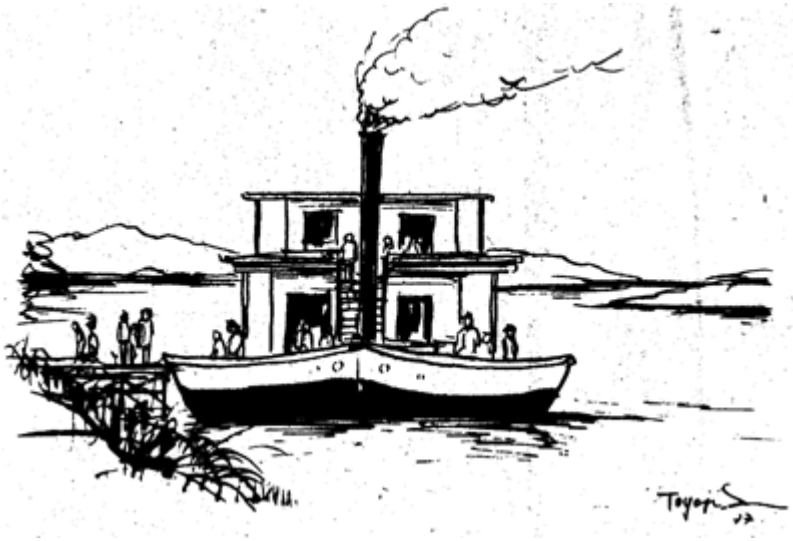
事業が軌道に乗るとは即住民が土地を耕し生産を得ることだった。

だが農耕者は理想や国策によってよりも、土地の良し悪しで定着する。地味が肥え、産物の搬出に便利な処が良い土地なのだ。しかし、そんな良い土地を州政府が外国人に只でくれるものだろうか？　という疑いが残る。

そこに悪意の存在を仮定しなくても、良い土地なら官有地としていつまでも放置されてなどおらず、すでに耕作者が入っていると言ってもいい。ブラジルは未開の土地こそ多く抱えていたが、日本より文明国でもあった。神戸で旅館に分宿しハシケで沖の移民船に運ばれてきた人々は、サントスで船が列車の引込線のある埠頭に横付けになり、そのままサンパウロの広大な移民収容所の中庭に降されて一驚したのだった。

そういう国で、サントス港からさして遠くないのにさびれたイグアッペの上流に眠っている五万ヘクタールの森は、農民にとってはかなりうさん臭い存在にちがいないのだ。

ともあれ、こうした矛盾や困難を抱えた森に、五人の先発隊は大正二年六月八日に入っていった。



連載２０

（２）

五人の先発隊は「ポント・デ・レジストロ」に着いたものの、さし当ってする事はなかった。州政府は植民契約に従って測量を開始してはいたが遅々としていた。まったく無人の新天地ではなくポッポッと土着の人間が住んでいる。開拓されて放棄された土地もある。土着の住民にとっては、土地は自然が人間に与えてくれたものであった。極めて人口希薄の土地では「私有地」とことさら主張する必要はなかった。

食うに必要な土地だけを耕作し、ブタやニワトリを家の廻りに放ち、果物の木を数本植えればよいのだった。あとは何がいるだろう。何も要らないのだ。金…金を貯めるために働く……？　金はいらない。何故なら使う処がないからだ。

森の中で流行の服を着ても仕様がない。森の中に住んでいると「富」というものはほとんど意味がなかった。都会の中では金持は高級住宅地に住めるし、貧乏人はゴミゴミした下町に住まざるをえない。人口の絶対多数を占める庶民は、もっといい処に住みたいと思ってアクセク働いているの

だ。金持は金持で、貧乏にならない為に働いている。しかし、森の中なら誰にだって陽は平均に当るし、鳥の鳴き声も聞こえる。木の緑もある。そういうものを金で買う必要はないのだった。

都会からやって来た人は森の住民を見て「こんな不便で娯楽のない処に住んで退屈しないだろうか？」と言うがそれは間違っている。ＴＶも映画も、娯楽などというものは所謂、暇つぶしにすぎない。暇つぶしなら森の中にはもっとある。

しかし、そういう言い方すら間違っている。森に住んでいる人は退屈しないのだ。「退屈」というのは文明の病いにすぎない。森の中にのびのびと住んでいれば「退屈」という観念は発生しないのだ。池の蛙が退屈しているのを見たことがあるだろうか？　樹がもし退屈したら何百年もの樹令を．保つことは不可能ではないか？

……こうやって自然の中に息ずいていた森の住人にとって、日本人の大植民地が、近付一帯にできることになり、州政府が測量を開始したことは青天の霹靂、いやそれ以上の驚愕であったにちがいない。急に四辺が不自由になるばかりか、うっかりすると自分の住む処さえ失ってしまうのだ。

住民の間に一大パニックが巻き起ったと想像できる。どこからどこまでが州政府の土地で、どこが個人の土地か・・・紛糾に紛糾がかさなり、五万ヘクタールという膨大な土地が整理されるのはいつのことか見当もつかない。

いざ測ったら土地台帳の数倍ある土地などが続出して測最技師を悩ますのだった。第二次大戦後のサンパウロ市近郊ですら五十アルケールの土地を半分売ったらまだ五十アルケール残ったといケ実話もあるくらいだから、当時のイグアッペの実情は想像できよう。雲に杭を立て、分割するような具合だった。

連載２１

（２）

レジストロの入植予定地の測量が進まない一方、下流のイグアッペ市では郡会議長アントニオ・ジェミレアスが「レジストロとイグアッペの中間に土地を提供するから小植民地を作らないか」という申し出を青柳にした。

将来レジストロだけが発展しイグアッペが置去りにされない布石だという。青柳はその申し出を喜んで受諾し、イグアッペ郡会はジェミレアスの私有地(約千四百町歩)を買い取ってブラジル拓植株式会社に提供した。

大正二年の九月にイグアッペ郡会と青柳の間で合意が成立したが、郡は土地を無償で会社に譲渡する一方、会社は区画した土地に日本人植民者を定着させる義務があり、五年以内に占有せざる土地は郡会に返す、となっていた。

肝心のレジストロ方面の土地の整理がつかない間、ブラジル拓植株式会社（註、後のブラジル拓植組合とはちう）取締役としての青柳郁太郎がなすべきことは、とに

もかくにもこのジプブーラに与えられた土地に小植民地を成功させることだった。

土地の大きさから割り出すと約三十家族を定着させなければならない。

ここが成功しなかったら州政府と契約した五万ヘクタール二千家族の植民地実現はえそらごと絵空事に終ってしまう。文字通りの試金石だつた。

青柳は日本直来の移住者を入れずに、まず、珈琲園を逃げ出してサンパウロ市で雑多な職業についている日本人移民を三十家族集めることに成功した。これは青柳が時間がなくて苦しまざれに思いついたアイデアではなく、植民計画の初めからその考えを持っていたらしい。つまり、ある程度現地の経験とノウハウを持った家族で基礎を固めた後に、日本から大量の移民を導入するのが最良の方策と考えていたと推測される。

鈴木南樹が書いた「日本人のペルー移住」(サンパウロ人文科学研究所レポート四号所載)の中に、植民地開設の夢を抱いてサンパウロ

の土を踏んだ頃の青柳との会話が記されているが、青柳の話として、

「カリフォルニア大学にいた頃、北米の発展した歴史を知るにつけても日本人は海外に新天地を求めなければならない〃と痛感した。南米が良いのではないかと思いペルーに視察旅行をしたのだが、英国系のベレネー植民地の移民課長マッケンジーと会談した折、日本人の移住を勧誘された。自分は日本人はハワイにせよ南洋にせよ出稼ぎ移民の限界をこえず今にわかに日本本土より植民せしむるの困難なるを説き、試験的に北米カリフォルニア在留の日本人農夫十人に渡航費を捻供し、賃金を備蓄させ土地を与え、その成功するを待って日本からの植民を招致するのが容易で得策であると説いた」

という興味ある部分がある。

いよいよブラジル植民地を開設するに当って青柳が取った手段は、彼が二十代の頃に北米生活の経験からすでに抱いていたアイデアだった。

連載２５

（２）

会社なり個人なりが官有地を只で貰う制度は今日でもブラジルに存在するが、よほど力がなければその土地を活用するのは困難である。植民者が定着しなければ、再び官有になってしまう。

青柳は短期日にとにかく入植希望者を三十家族かき集

めるのに成功した五体揃った連中ならいいという感じだった。芯からの脱落者たちではないにしても、脱落者の状態で異国の大都会の底辺にさ迷っていた人々だとは云える。青柳自身後にこう語っている。「奥地から応募者がないのでやむをえずサンパウロ市内のコンデ街で募集した。コンデ街というのは邦人のコーヒー耕地に不向きの人即ち農業労働に耐へざる失業者の集る処である」

＜農業労働に耐へざる失業者＞が開拓の先発隊とは先行きも不安な話であるが、日本の本社や州政府への報告では、数字の実績がまず物をいう。

入植した三十家族が、通称、〝コンデのバガブンド〟と呼ばれていることなど、報告書に記す必要はないのだった。

そして、資本金百万円の会社の初仕事としては、三十家族の脱落者を一まず成功者に仕立てることはさして困難ではない。

勿論、青柳も真剣ではある。サンパウロからイグアッペに本拠を移した。

「私自身も植民地の近所に住居し、親しく職員と交わり、移住者とも馴染になるのは肝要と考えた。そこで本国との交渉上不便ではあるが、イグアッペ市に住居することにした」

と青柳は書いている。

「イグアッペも帝政時代、相当繁昌せる都会なりしことは現在の偉大なる天主教会及び所々に散在する大邸宅の廃

墟によるも容易に想像されるが、奴隷廃止後大地主達漸く他に移動し、今やすっかり荒れて住民も少なく、営業としては僅に二、三の小精米場と種々の雑貨店と二軒の旅人宿あるのみだ。電灯もなく、市街地区には牛がぞろぞろ歩いていて、夜はうっかり散歩もできない。牛に突き当る恐れがあるからだ。他との交通は月二回サントス往復の小蒸気船による外はない。それでも電信局があって、日本との電報通信は自由にやれた」

レジストロにいた先発職員たちも十月二十四日にジプブーラに集合し、農業技師藤田克己、書記築瀬兵等が収容所つくりの準備・大野良一、野村秀吉、三浦源二郎の三人は土地の調査測量、農業技師橋田正男が作物の研究に当り、医師北島研三も到着したのだった。

成功を約束させられた三十家族は大正二年の十一月にサントス港から四百トンの蒸汽船にゆられてイグアッペに着いた。

若くして海外発展の夢を見続け、いまイグアッペの浜に降りたった長身の青柳をカモメのジョナサンに例えるならはその後について来た三十家族の人々はカモメの団

体サンと呼ぶべきだろうか？　この落伍者風の一団は河船に乗り替えてジプブーラに遡ったのだった。

連載２３

（２）

カナンの地を夢見てさすらい、そして、失望することに馴れてしまった人々だった。失望だけがいつも味わうことができる身近かな感情であった。彼等は桂山をどんな目で眺めただろう？

さして感激的な熱い光景が展開されたとは思えない。なんとなく〝開拓〟に尻ごみしながら恐るおそる上陸したのではなかっただろうか。

しかし、豊富なリベイラ河の水には喜んだはずだ。コーヒー園にもサンパウロ市にも河といえるほどのものは流れていなかった。

何人かはさっそく裸になって飛び込んだ。なにも身につけていなかったので土地の人間が仰天して、早速警察にうったえた。海岸地帯の土着人はカイサーラ、奥地ならカボクロと呼ばれるが、カイサーラもカボクロも他人に肌を見せることは非礼だった。女は服を着

たまま体を洗う。〃小さな長椅子〃（下駄）をはいてやって来た日本人の一団は、静かな生活を送ってきたカイサーラの目には随分騒々しい勢いの良い人間に見えたことだろう。

しかし、本当は失望ばかりして、もう失望だけはしたくないという消極的な望みを抱いた人々だった。

会社は翌日から人々に仕事を与えた。道路、家、製材、農事試験所……。仕事はいくらでもあった。自分の家を作っても日当が入る。更に一家族に一地区（二五ヘクタール）を貸し、収穫の七五％を植民者がとり、二五％を会社に払うようにした。この条件を三年据置いて植民者が土地を買う気になったら何年払いかでボチボチ払ってくれればいい。農業技師も医者も無料でついてくれる。……いくら定着する気のない人々でも、こうまですれば何となくあたりを耕し始めたとしてもおかしくない。「馬を河辺まで連れて行くことはできるが、嫌がるのに水を飲ませることはできない」という比喩が仏典にある。青柳は三十家族をリベイラ河端に連れて行き、とにかく水を飲むませることに成功したのだった。

ジプブーラ植民地はこの年に死んだ桂小太郎に因んで『桂植民地』と改称し、イグアッペ郡会の承認も得た。

入植して一年後に、奥地のコーヒー園で働いている移民向けに配布された『イグアッペ移住案内』というガリ版の勧誘パンフレットには、入植した人々の経験談がズラッと並べられている。

たとえばこうである。

『桂植民地第二号地区、鹿児島県人棚田艮政（夫婦のみ）談』。

私は機械職工で本国に於ては長崎造船所に働き四年前当国に来ましてもやはり職工としてマルチンス機械工場に雇われ、一日七ミルレースの賃金を貰うておりました。従って農業は全くの無経験で土地の耕作は今度が生まれて初めてです（続く）」

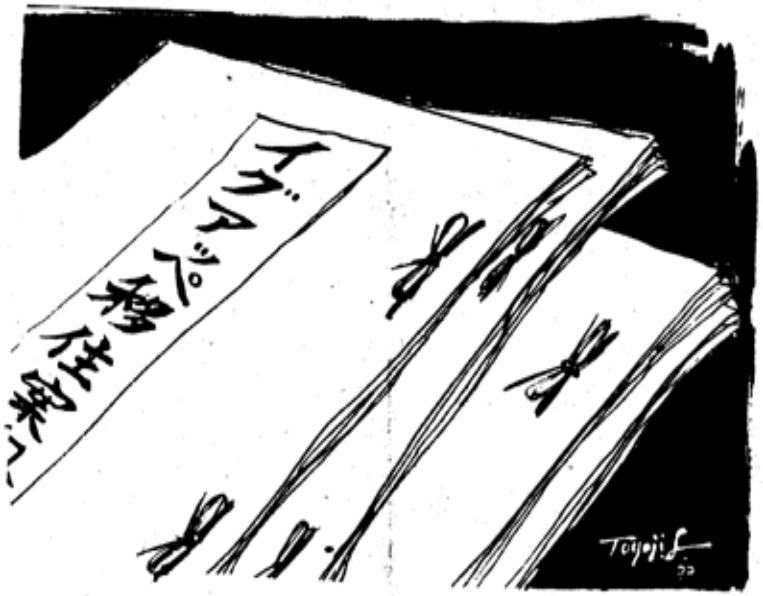
連載２４

（２）

「（相田艮政の談、続き）それに桂植民地における自分の本務は製材所の機械扱いでありますので農業の方には手が廻らず、臨時雇いの土地のブラジル人によりこれを行うておりました。

米の植付けは昨年十二月にはじめ、一月中旬ようやく終りましたところ二月はほとんど雨が降らず、聞けば本年は稀有の大旱であるとのことでありました。これがため稲は段々と枯色を呈し、一時は全滅と覚悟した次第でしたが、幸に三月の雨でその大部分が復活し、このほどついに籾百四十俵とり上げました。もしあの旱がなく、また植付けをもっと早くしましたなら収穫は二百俵内外に達したと思われますが、本年は無経験者の片手間仕事、それも初年のこと故より多くは望んでいませんでしたので、まず本年はこのくらいで結構と存じます。

過去一年間の私の勘定は次の通りであります。」
支出及び収入の表が付されているが、純利益千三百ミルレースとなっている。
当時は一円が一ミル五百レース程度だったから九百円近い利益になる。無一文で入植して家まで作って、その上、雇人に畑をまかせておいて九百円も儲けて〈まず本年はこのくらいで結構と存じます〉と鷹揚に言われたのでは、食うや食わずで末明からこき使われていたコーヒー園移民にはさぞショックだったにちがいない。
その他、パンフレットには鹿児島県人、上村常次郎（元籠職人、サンパウロ市で大工。夫婦と弟と小児）純利益千百六〇ミルレース。福島県人、只野利助（夫婦と弟、元農業）利益六百十三ミルレース。広島県人、有川繁太郎（夫婦と小児二人、元杣取、材木商。サンパウロ市にて大工）純利益千百十一ミルレース……などと並んでいる。
奥地の移民たちがこのパンフレットを読んでどんな反応を示したかは想像にかたくない。
青柳はとにかく無から〝実績〟を作りだした。コンデの



バガボンドがそこまでやれたのなら俺たちなら……と激しいコーヒー園労働に堪えている人々が考えるのは当然である。

これと同種のパンフレットは日本でも配布された。大正初期の日本では百姓が利益をあげることなど考えられなかったから、ただ日々を食うために田を打っている人々に希望を与えた。あまりにも遠い国の夢物語りであったが、幾人かの人々はその土地に行って自分の手で夢をにぎってみょうと思いたったのだった。

連載２５

（２）

青柳のしていることは商売人のやり方だった。

彼自身の理想とは喰い違う部分が多かった。しかし、ブラジル柘植株式会社という会社の取締役になったからこそ、自分の理想が実現されつつあるのだった。理想論だけでは何もできない。ウイスキーだって売りだされた時は味がいい。とにかく二千家族集めなければ会社を設立した意味がないし、会社も赤字でつぶれてしまう。

そもそも、今日の流儀では、移民事業という儲けにまったく縁がなさそうな仕事に、たとえ桂首相の肝入りがあったとしても、資本金百万円もの民間会社が設立されたのが不思議に感じられるのだが、当時はそれなりの背景はあった。

明治時代のハワイ移民の会社は儲かったのである。移

民会社はいわば今日の旅行社の仕事をしていた。ハワイ側の耕主は一人三〇ドル（六〇円）払い、船賃は三〇円だから一万人扱えば三〇万円の利益になる。一万円で会社設立の出願許可の手続きができた。

南米移民の会社も従って根本の機構は今日の旅行社と変らない。違う点は唯一つ。今日の旅行社がとにかく平和な観光や商用の往復切符を売るのに、当時の南米行き移民会社は（地獄の？）片道切符を売っていた、ということだ。

もっとも　ブラジル拓植株式会社の会社としての存在理由は、航海のマージンではなく五万ヘクタールの土地に資本投下して整備し一入植者にその土地を売却して得られるのである。航海、すなわち導入の実務は東洋移民合資、南米移民、森岡移民の三社に委託してあった。

一千四百ヘクタールの桂植民地は、上流のレジストロを中心とした五万ヘクタール（一ヘクタールは一町歩強）のイグアッペ植民地のモデルケースにすぎない。

土地の下付を受けるのが先決問題だった。一九一四年（大正三）九月に中心の市街予定地二百ヘクタールの先住者との買収契約がどうやら纏った。州有地を譲渡してくれるといっても、住人がいれば結局は会社が直接交渉して買い取らなければならないのだ。

同じ九月に州有地一万六千ヘクタールが図面上の仮交付を受けた。そこも無人の地ではなく人々があちこちに住んでいる。親の代から森の中に平和に住みついている

人々だった。細い径が森に通じていて、親の家、兄弟の家、親類の家へと素足が辿るのだった。

植民受入れ態勢を整えるためには彼等を立退かせ、道路、地区割りをしなければならない。土地所有者はまだ金で解決がつきやすい。所有権もなく、ただ父祖の代から自然に住みついている住民を相手にするのはもっと困難だった。自然の秩序は神が造ったと素朴に考え、生きてきた人々の前に法と契約した植民者の一団が現れたのだから。

連載２６

（２）

直接、交渉に当ったのは主に藤田克己である。

盛岡高等農林学校を出てからアルゼンチン、ブラジルを放浪し、マット・グロッソ州鉄道工事の工夫もかなり長くやった。

泣きごと、おどかし、哀訴……ゆううつな交渉の結果、金を与えて土地を手に入れても藤田の心は釈然としな

かっただろう。金の使い方を知らない人間に金を与えても幸せになれる筈がないからだった。金を使う必要がなかったから、使い方を知らないのも当然だった　金のある間はなにもしない、いくらでも酒が買えるから酔いつぶれている。

『奴等はだらしない。金のある間は働かん。怠け者だよ』

と言うのは森に住んだことのない人間である。森の住人は無欲なのだ。

『無欲であれ』というのが森の摂理だった。無欲でなければ、生物は森の中で生き延びることはできない。金という便利なものが転げ込んで食糧が入手できれば、働いて食物を得る代りに金を使って食物を得る……それが森の摂理に従った考え方なのだ。

満腹なのにまだ餌をあさる鳥などいるだろうか？　食いすぎて、飛べなくなってしまう。欲張りの蛙など存在しない。身近かに昆虫が飛んでいたらわざわざ隣の池まで餌を追って行く必要はないのだ。

金や物品を貯える、という考えは森には不要な観念にすぎない。人々は文明という不安定な社会に生きているから明日を恐れて『貯え』を始めるのだ。個人も国も貯えるために必死に働き廻っている。

森は安定した世界だった。太陽の光と熱だけで造られる社会だった。食うだけの米と果物と肉は太陽さえ輝いていれば、今日と同じように確実に明日もとれるのだ。「貯える」ことにほとんど意味はなかった。

そういう意味で、カイサーラ達の金の無意味な使い方は正しいのだった。しかし、その金がなくなったとき、帰るべき森はもうない、ということには気付かない。

外観は似た土地が依然として存在する。しかし植民者の群が入り込み、森の摂理に人間界の規則がとって替ろうと動き始めた土地になっていた。

連載27

（2）

レジストロにはボツボツ日本人家族が入り始めた。しかし、何といっても日本直来の移住民が大量に入らなければ本当の開拓は始まらない。なかなか移住民は来なかった。州有地の実際の交付も一九二六年（大正五年）八月にやっと予定地の五分の一を得ただけだった。

その頃、ようやく日本から集団移民を送出するという待ちに待ったニュースが入った。植民地本部にドッと喚声が挙り、昼夜兼行の受入れ準備が始まった。

リペイラ河右岸の支流カラビランガ川に添って十アル

ケール（二五町歩）単位で百五十地区に分け、道路を通す仕事だった。原始林の中に複雑な小川が幾本も曲りくねって流れている。各地区に水と地の利を与え便利な道路を開かなければならない。測量隊、区画隊、道路隊と分れ、それぞれ多くのカイサーラ達を使いながら野営を続けた。

比較的しのぎやすい冬期ではあるが、暑く、ブヨや蚊が多い。ヤシの葉で頭上をおおった丈の野営は蚊の群の中で寝るようなものであった。

そうやって突貫工事をして受入れ体勢をどうにか整えたが、日本からの移住民は一人も来なかった。

その年も暮れになって第一回の植民団が日本を出発した。第一次大戦の最中でリバプールから乗り換えた英国船はドイツの潜水艦に狙われていた。それでも薄氷をふむような船旅は無事に終り、大正六年の二月にサントスに着いたのだった。（このドゥリーナ号は英国への帰途撃沈された）首を長くした人々が迎えると「大植民団」はたった四家族、二十名たらずの人々だった。

大正六年、一家族四百六十円の融資をするという好条

件で、幻燈・講演を打って廻って、全国でたった二十二家族の応募をえた。

移民法で募集や手続きは移民会社に委託しなければならないから、地方代理人はマージンの良いコーヒー園労働者ばかりかき集めるのだった。移民会社は大正六年だけでも九百家族のコーヒー園労働者を扱っていたのだった。

そのうちに、ブラジル拓植株式会社の第一回払込みの三十万円はなくなってしまった。

青柳は更に四十万円の払込み要請を打電したが日本の株主たちの空気はとても出資に応じそうになかった。

まったく事情の分らぬ遠い国で、まだ開拓すら始まらないのに三十万円の大金が水蒸気のように消えてしまったのだ。これ以上金を注ぎ込んでも無駄ではないか、とても出資額に応じた配当など望めないのではないかと不安になっていた。

青柳をはじめ現地職員たちは、土地が下付されない、人が来ない、金がない、という最悪の状態に追い込まれた。

連載２８

（２）

今どきの企業なら完全にボシャッてしまうような三重苦の状況に追い込まれた現地の社員たちが頑張れたのは、開拓地に共通する気慨と一種不思議な明るさのためだっ

たろう。平野植民地の例に見るまでもなく、人は開拓を始めるとなぜか前しか見なくなってしまう。

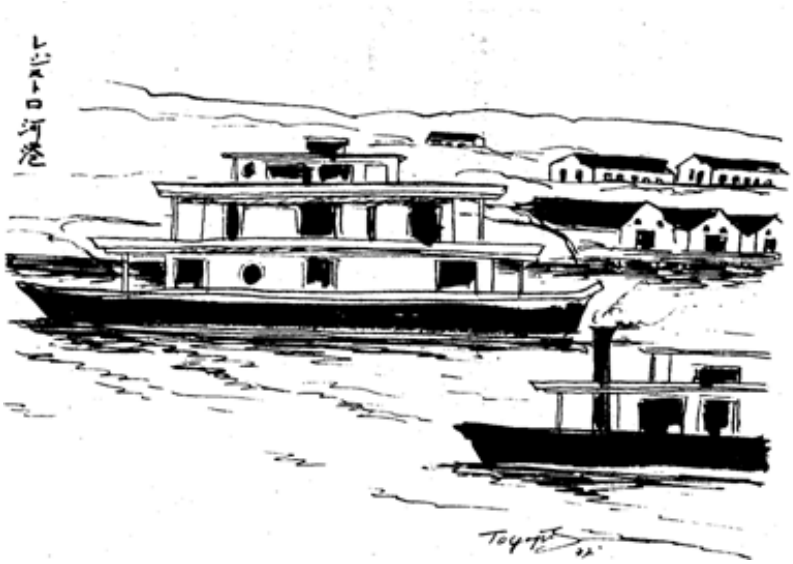
大正六年七月の臨時議会で海外企業投資助長のため東洋拓殖会社法の改正案が通過した。この案に従い関係会社が合同して資本金一千万円の海外興業株式会社が成立し、青柳も新会社の重役になり、レジストロ、イグアッペ植民地はその経営下に移った。

この合併には現地側は青柳以下全員反対だった。移民輸送を業とする他の移民会社に、開拓地建設を目指す当社が併合されるのは無意味であるし、我慢できないとする雰囲気だった。すでに本社と開拓現場の人間とでは考えがまるで違ってしまっていた。

確かに青柳たちの意見は一理あった。移民会社は輸送専門の移民屋だと見られても仕方ない。例えば皇国植民会社社長水野竜がサンパウロ州政府と第一回ブラジル移民の契約を交したとき、ブラジル側の条件に「コーヒー園の義務年限が済んだ移民に鉄道沿線の便利な土地を与え、学校道路を作り植民地を提供する」という個所がある。ところが第一回移民がブラジル、に着いたゴタゴタのため、水野はこの好条件の申し出を簡単に断ってしまったのだった。いくらブラジルが土地をくれ、道や学校を建ててくれてもこちらにもかなりの資本がいる。そんな金はない、というのが断った理由である。たしかに、その時の水野はひどい窮地にたたされていたにせよ、あまりに性急な断り方であった。移民会社の体質と限界を

示したエソードで、青柳たちが合同に反対したのも当然であった。

『海興』の経営に移りながらも、レジストロ植民地にはだんだん入植者が増えた。大正七年の末には九十九家族が応募し八年は百五十家族が申し込んだ。まもなくレジストロ植民地の日本人は二千人を突破した。大正九年には更に上流の山奥にセッチ・バーラス植民地が開設された。レジストロ植民地の四倍の入植予定地を持つ広大な地域だった。



これで海興の「イグアッペ植民地」は第一植民地として「桂」。第二植民地として「レジストロ」。第三植民地として「セッチ・バーラス」の三つを持つことになった。

連載29

（2）

私はパウロさんの家で夕食をしたあと散歩にでた。満月が昇りはじめたので八時頃だったろう。橙色の丸い月が木の枝から離れると、すぐ青くなった。空気が澄んでいるので都会の月ほどは赤くない。私が住んでいる街で

時に見かける月はどこかで一杯飲んだサラリーマンのように真赤な顔をして、フラッと昇ってくるのだった。八時頃だからビルの蔭に昇る月を眺める私の体にもアルコールが入っていることがある。お互に顔を見合わせてニャッと笑う感じだった。しかし、私より満月の方がすでに飲みすぎているらしく、煤煙の中を苦しそうにヒョロヒョロ昇ると、たちまち蒼い顔になる。

私は月に照らされてサトウキビ畑の横の径を歩いた。左手に桂山の影が黒く沈んでいる。夜鳥が鳴いた。

少し食べ過ぎたので散歩をしている。小魚の唐揚げが旨かった。夕方、パウロさんの息子と使用人がカヌーに乗って捕ってきたのだった。サグァイアルやカラーなどの雑魚に混って四十センチほどの、雷魚にちょっと似たタライーラや淡水スズキ（カンブリアペーバ）なども捕れていた。

米も旨い。ここのイグアッペ・アグーリヤという品種は一九二八年のミラノの品評会で入賞していると、南聖農事試験所の三沢技師に教わった。

そう聞くとなおさら旨く感じるのかもしれぬが、サン

パウロでリオ・グランデ米を食べつけていると、こういうサッパリした米はいい。サンパウロの日系人がよく食べるリオ・グランデ米といっのは、どうやら、台湾で磯博士が創りだした「蓬莱稲」であるらしい。内地米ほどベタベタしないがやはり日本人好みの味がする。いつのまにか副食物もその米に合う味付けになっているのが面白い。同じ魚を食べるにも刺身なら内地米、焼魚なら蓬来米、唐揚げならイグアッペの米といきたい。

各種の米が選べるのはいい事だ。日本の人と食物の話をすると微妙な点で喰い違うが・良く考えてみると米のせいであることが多い。日本人はゼイタクをしているようだが、単一の米しか知らないから副食物の味も重層的には知らず単一な見方をするようだ。

例えば、ビフテキの隠し味にショウユを使うのが最高、と固く信じている日本人が多い。確かに内地米と一緒に食うかぎりではその通りだ。しかし、イグアッペ米となるとそのテクニックはさほど通用しないようだ。

ついでに記せば、イグアッペのモチ米は最高である。魚釣りにイグアッペに行く人は多いが、どうせ釣れないのだから帰りにモチ米を買ったら良い。

孤りで歩いているせいもあるが、満月の月の出はシンと静かな感じがあった。バナナ林の若葉が金属のように固い輝きで月光を反射していた。ジェラルミンの巨鳥の群れが翼を休めているような光景だった。

連載３０

（２）

四辺に人家の少ないこういう場所に住んでいると月が人の生活に与える影響が深いことをしみじみ感じる。

もともと、月はすべての生物の生活に影響を与えているので人間とて例外ではないが、街の人は月などは無視した生活をしていてその影響をさほど感じない。せいぜい満ち潮に赤ん坊が生まれ引き潮に病人が死ぬと言うくらいのものである。

せいぜい……といったが生まれ、死ぬことは生命の根元である。月の満ち欠けが生命のリズムに強い影響を持っていることは誰でも知っているのだ。

街の灯に囲まれていると、そのことを感じないだけだ。

桂植民地の跡を孤りで歩くと、満月より見るものはない。月という天体の存在をひしひしと感じるのだった。新月の夜に種を蒔くと虫に食われず作物が成長する。月が満ちる力は地上の生命にも活力を与えるのだった。

こういう河岸の朝夕はポルポラという微細なブヨが多く、とてもかゆくて悩まされるが、大潮（新月と満月）の朝夕に特に活動が激しい。ふだんよりずっと多くのポルポラがたかってくる。

また、マングローブの根方の泥に穴を掘り、人影が近ずくと素速く穴ふかく隠れてしまうケガニなども、大潮の日は交尾に夢中なのだろうか、動きが鈍くたやすく捕えることができる。

潮の干満は主として月の引力の影響によって起きるが、海ばかりでなく地球上の液体はすべてその影響を受けていると思える。ケガをしても上げ潮のときは勢いよく血が出るし、引き潮のときはさほどでもない。

従って、女性の体液も満ち潮のときは勢よくあふれ、引き潮のときはさほどでもない。最高のセックスは月の満ち欠けに従ってなされなければならない。引き潮のときにいくら頑張っても、月の引力に影響された女性の体はさほどには応えてくれないものだ。

最高の潮時というものは大潮（満月及び新月の前後）の満ち三分から始めて満潮時にクライマックスに達するようにするのが良い。

しかし、潮時は経度でずれる。残念ながらサントス（サンパウロ市も）付近は朝と夜の九時前後が干潮の極で、満潮はその六時間後の午後三時及び午前三時頃である。

従って、サンパウロ市の住人が最高のセックスをしようとすれば午前（及び午後）の十二時頃に始めるのが理想だ。そして二時か三時に終わる。

残念ながらこれは一般の人には無理な時間である。土

曜の夜パーティで夜更かししたときくらいだろうか。
平安時代の和歌が男女の仲と月との関連をあれほど濃密に暗示しているのも、そのことではないか。都会の現代人が忘れているだけだ。こうやってイグアッペの夜、一人で歩いていると、月の存在が私の体のなかに入ってくる。いずれにしても潮時表を釣りのためだけだと思ってはいけない。

連載３１

（２）

しかし田舎に住んでいると新聞の潮時表を眺めたりする必要はない。
開け放しの窓から月光が射して、なにか微妙な力が体に働きかけるのを感じとることができる。月の昇りを眺めていると華やかなうちにもシンとした静かな感情を受ける。これが干潮が人体に与える感覚なのだ。シンとしたものがある。
酒でも飲んで月を眺めているうちに感情がゆっくりと頭をもたげてくる。あまり早く酔う酒は不適当で、日本酒などをチビチビ飲んで低く唄でもうたっていると潮が満ちてくるのだ。
体中が月光に囲まれているような感覚が潮と共に満ちてくる。
日本の昔の月見の宴は多分そんなものだったと思う。古典を読んでも平安朝の男女は月が与える情感を知って

いて、大事にしていた。有明の月の淋しさは満潮が過ぎて干潮になった感懐にほかならない。和歌はひどく適確に生物としての人間感情を詠っている。男女の交渉に月があれほど密接に結びついて詠われているのは、単にキレイ事でも絵空事でもなかった。現代の都会人が、もう、理由を知らずにいる、ある種の衝動を平安朝の男は理由を知っていて優雅に実行したのではないか。

私が散歩をしながら、しきりにこんな夢想にふけるのは、じつは理由がある。かってこの植民地に若くして入植したKという男のことを想っての連想なのだ。

私が知人の田端氏から聞いたかぎりでは、Kはこの土地の自然にまったく身を委し、自然と共に呼吸することに喜びを感じ、成功を第一の目的とした移住民の目から見れば異端で、むしろ退化してしまった人間だったらしい。

彼は森に消えてしまったのである。・・こうやって月の夜に一人で散歩をしていると、入植初期の人々の感情の幾分かでも感じられる気がする。

私はいよいよ田畑邦三とKの話を始めようと思う。いままで単にKと呼んだがここで加山善雄という名を与えよう。それが本名かどうかはさして重要でない。なぜなら彼は単に一人の森の男として、森に調和した生き方を求めていたのだから。以下は私が田端邦三に聞いた話である。

連載３２

第三章

暗い森の底から賑やかな弦楽器の響きが聞えてくる。カバキーニョとバイオリンの音だった。カバキーニョは小型のギターで甲高い音がする。この辺で使う楽器は全て手製だった。一本の木を暇にまかせて丹念にくり抜いて、胴の蓋だけは別に彫って張り合わせる。無骨な音色だが、それだけに力強く遠くまで響いた。　カバキーニョのリズムの合い間に、タマンコ（ポックリ）で床を踏み鳴らして調子をとる音も聞えてきた。

田端邦三と加山義雄は真っ暗な山道を音楽に吸いよせられるように、黙々と歩いていた。二人とも手に火の付いた薪を一本ずつ持っている。炎はとっくに消えていたが、暗闇に馴れた目には燃え残りの赤い光だで足許を照らすのは充分だった。火が消えないように棒を振りながら歩けば、ちょっとした山径の用にはたりるのだった。薪を振りおろすとき火がボッと光って足許を照らす。次の一歩は真っ暗で、その次にまた火の赤い光がくる。そ

んなリズムで、踏みなれた山径を二人は足早に歩いているのだった。

二人とも川の水で昼間の汗を流してサッパリした白シャツに着換えていた。

『よしえは来てるかな』

田端が言うと、

『さあ……。あいつ、このごろジョンとおかしいというぞ』

加山が答えた。

『ジョン？』

『よしえの家の畑に手伝いに来ている男さ』

『ああ、あいつか』

『桑畑でジョンがよしえのオッパイをもんでいたと、長助が言ってた』

『チェッ、外人は手が早いからなあ』

田端が口惜しがると、

『フフフ』

後からくる加山が笑って、

『おまえ、手を出すつもりだったんだろう』

と言った。

『そろそろ刈りとってもいい時期だと思ってた。……しかし、よしえの親父はうるさいからなぁ』

『ジョンは親父の気性は知らんから気楽だろう』

『あとで大変だぞ』
『追い出されるだけさ。自分の名も書けない男と一緒にさせるはずがない』
『しかし、外人の味を覚えると日本人じゃ駄目だというぞ』
『フッ』
後ろで再び笑い声がして、
『おまえは自分のことを言っているのか？』
と加山が言った。
径が平らになって家の前にでた、。その家の中から響いてくる音楽は軽快なポルカのリズムに変っていた。こんな、土着のインヂオと黒人の混血と日本人しか住んでいない山奥に、ドイツ風の音楽が響くのは不思議だが、イグアッペの先にあるカナネイヤ付近に昔あったドイツ人植民地が遺した音楽だった。

連載３３

（３）

二人は手にした薪を台所のカマドに投げ込んで家の中に入った。
石油のカンテラが板壁の二ヶ所に掛っていて、ピョンピョン跳ねている男女の群れを黄色く照らしていた。焼酎（ピンガ）と体臭と石油と安煙草のにおいが、新鮮な籾の匂いと混つて二人を包んだ。
「オイ、クニ」

この家の娘のマリアが声をかけた。ピンガのコップを差し出している。邦三はマリアの片腕をつかみながら左手で酒を一息にあおり、コップとピンガを加山に渡すと、体を振りながらマリアと踊りはじめた。泥靴は酒をのみながらすでにぬいでいた。狭い室なのでポルカのリズムでグルグル回るとやたらに体がぶつかる。足の裏にザラザラと稲の穂が当る。それをふみつけながら、ヴァイオリンの旋律に合わせて踊るのだった。都会人の足の裏だったらイガが刺って痛くて踊れないだろうが、ここでは足の裏の皮の薄い人間なんていないのだった。隣りの女の木ポックリでふまれても、「オッ」と声を出すだけだった。

板戸こそ開いているが狭い室内で跳ね廻っていると、田端はたちまち汗をかいた。マリアも汗ばんでいる。

踊りの群れの中心に行くと、弱いランプの光はまわりの人々に遮ざられて届かない。田端はそこで何度か彼女の乳房を撫でた。小麦粉の袋を袖なしブラウスに仕立てたので、いつも担つぎつけている目のつんだ木綿の手ざわりの下に、つるつるした感じで乳房が張っている。

マリアが避けなかったので田端の気特は大胆になったが、籾を踏む義務を忘れた訳ではなかった。足は一所懸命に籾を踏んで跳ねながら、上半身はマリアの躯を考えていた。やたらに他の女たちの尻や胸にぶつかる。しかし、誰もとがめる者はいない。みんな酔っぱらっていい気持なのだ。

ポルカがやんだ。

「もういいかな」

マリアの父親がかがんで籾を調べた。

「よし、これはもういいぞ」

床に敷いたシートの上のモミが集められ、新しい稲穂がドサッ、と投げこまれる。それを手伝わない人は思い思いに休んだり酒を飲んでいた。

稲を刈りとると、この辺の人々は、こうやって集って「ファンダンゴ」を踊るのだった。コーヒーと酒はその家で出すのがきまりだった。日本人のように鎌で根本から刈らず、ナイフで穂だけつんでいくのが土着のやり方だった。両手の指の間に一杯穂をはさんで、首からかけた袋に入れる。藁は材質が弱いので利用しない。ナイフもあり合わせのものを使う。道で拾った鉄片でも磨いでナイフにした。折れたスプーンの柄などは磨ぐと、とても使いやすいナイフになる。刈り入れの熟練に田端も驚いたが、やはり日本式に鎌で刈る方が能率は上った。鎌なら一日三俵近く刈れるが、ナイフでつむのは一日一俵くらいだった。

連載３４

（３）

だから、日本人は稲を千歯でそいだり、台で叩いたりして籾にするので「ファンダンゴ」を踊る必要はないのだが、田端のような青年たちは「ファンダンゴ」の雰囲気が好きで近くの家へ踊りに行くのだった。

新しく籾が敷かれて、カバキーニョがカチーラを鳴らしほじめた。スペイン舞踊のように足を踏みならしてリズムをとる踊りだった。タマンコをはいている女が多いので床だとさぞうるさいだろうが、籾の上だからドサドサと鳴るだけだった。

その足音に負けまいとカバキーニョを鳴らしながらマヌエルが声を張りあげて唄っている。曲はいくつか決っているが、詩はたいていい自作だった。いい文句がでると、

「ヒヤーッ」

と歓声があがる。

田端は汗だくになってマリアとはね廻った。酒の酔いが一遍に体中に廻ったようだった。

次はラメントという遅いテンポの曲だった。バイオリ

ンの音が豊かになったので振りむくと、加山が弾いていた。痩せがたで長身の加山にはバイオリンが似合った。ただひどく不恰好な手製の楽器なのが田端には残念に思えた。子供の頭をバイオリンで叩いていたのを見たことがあるが、子供の頭に大きなコブができるのだ。もっとも、そのくらい頑丈だからこそ、こんな辺都な処で役に立つのだった。

加山は日本の中学時代にフルートを練習していたそうだ。その楽器を彼は今でも大切に持っているが、穴を押さえるタンポが破れて音が出なくなっていた。タンポはフェルトを魚の腸で包んだものだそうで、加山は釣った魚の腸を干して一心に作っていたがうまくいかなかった。イシモチなどのニベ科の魚の腸がいいということだった。

彼には音楽の才能があって、土地の男たちがかき鳴らすカバキーニョやヴァイオリンなどもすぐ弾けるようになった。田端がファンダンゴの音楽のリズムをどうやら聞きわけられるのも、加山に教えてもらったのだ。

田端は加山の才能を高く評価しているが、こんな処では才能をのばす余地はまったくなかった。音楽だけではなく、すべての能力は芽のまま枯れるしかない。いや、芽どころか、萌芽さえも気付かれないだろう。毎日、山の中の畑で働くこと、食うこと、寝ること……それだけの生活だった。そして、いくら働いても金は儲からなかった。その代りへあまり働かなくても食うに困らなかった。

土着の連中は金を儲けようなどとは、生れてから一度

も考えたことはないらしかった。自分たちが食うだけ働いて、ノンビリ生きていた。魚や鳥や獣を獲ったり、女の尻を追いまわすのが男の楽しみだった。

田端は内心では焦りながらも、一面ではそういう生活の楽しさが解りかけてもいた。今、彼はマリアの事しか考えていない。スベスベした乳房を思いきり握りしめたかった。それも、今夜……。

連載35

（3）

マヌエルがサンバを鳴らしはじめた。「カベーロス・ブランコ」（白い髪）という、彼の十八番の曲だった。初老のマヌエルが唄うと、なにか唄に実感が籠るようだった。

『あの女のことを私のそばで言うな。私の苦しみを思い出させないで欲しい。

私たちは若かったし。

楽しみもした。想い出すと懐しい。

あの女の為にやくざな　仕事もしたよ。

でも、もう言わないでくれ、せめて私の白い髪にだけにでも遠慮して欲しい……』

最後の二連は皆が合唱して籾を踏みならすのだった。間奏を加山が上手に弾いた。カンテラの付を片頬にうけて板壁と同じように黒くくすんだ肌のマヌエルが次を唄う。

『私の涙もあの女の笑いも、いまは私の白髪に映ってい

る。過ぎたことだ。
私の残り少ない命のために、あの女のことは、もう言わないでくれ』
悲しい歌詞だが、リズムは陽気なサンバだった。白熱的に全員が踊るので籾はほとんど穂から離れた。
曲が終ると、
『小便しに行かないか』
と田端は低い声でマリアを誘った。あまり上品な文句ではないが、外にでても何もないからほかに誘いようがないのだ。
『うん』
彼女はうなずいた。
二人は目立たぬよう、べつべつに外にでた。

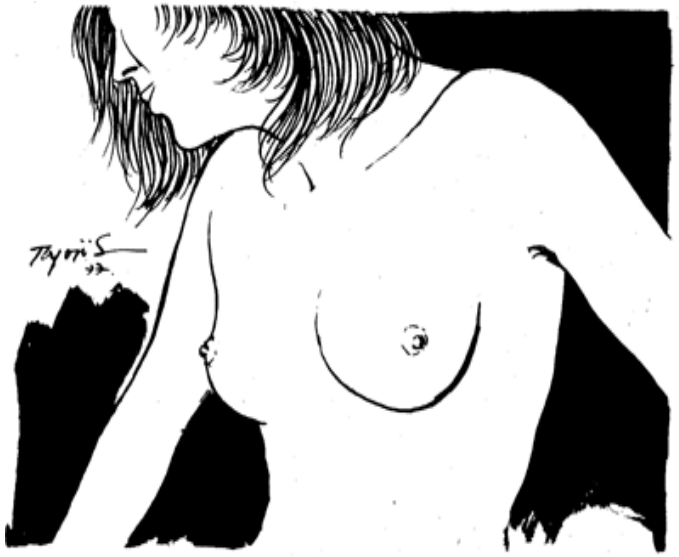
夕方は曇っていたのに、いつの間にか星がでていた。海岸平野に落ち込む山脈の裾にあたるこの処は天気が変りやすい土地だった。稲を収穫する今ごろなど、二日と晴天が続くことがない。晴れていたかと思うと、サッと雨が通るのだった。『ファンダンゴ』のように皆が集って集中的に籾落しをするのも、悠長に籾を干したりしていられない気候の為でもあった。『ファンダンゴ』にかぎらず、人々は助け合って仕事を晴れ間に片付けてしまう風習を持っていた。
闇の中で田端の足音を聞いて、柵の中のブタが一しきり鳴いた。

ブタの囲いの向う側へ行けば家からは見えない。マリアの白っぽい上半身が近ずいてきた、。

レモンの木が三本生えている。ここは昼間は彼女の弟や妹たちの遊び場だった。田畑はマリアを抱いて、レモンの木の幹に押しつけた。ブラウスをとって枝にかけると浅黒い肌は闇にまざれてしまった。少女のぬけがらのように、白い木綿の布が頭上の枝に細くかかっていた。

田端は自分のシャツが目立つことを恐れて脱いだ。日に焼けた彼の肌の色も混血のマリアとさして変りはない。

汗でしめった少女の肌を田端は抱きよせた。



連載３６

（３）

森の闇の中に触覚と聴覚だけが存在した。田端は少女の上半身をまさぐり・口づけした。固い乳房だった。皮膚が張切っていて、全体がゴムのように弾力があった。乳首もグミの皮のようにツルツルしていた。

家の中から賑やかに聞えていた音楽がやんだ。籾を換

えているらしい。人声はするが、あたりがずっと静かになった。

田端は耳をすませて人の気配をうかがいながらも、彼女の体を愛撫していた。マリアは口をとじて鼻で呼吸をしている。その息が荒くなり、耳ざわりなほどあたりに響いた。

「ホウ、ホウ」

とフクロウが鳴く。

もっと遠くでイノシシの唸り声が聞こえた。

彼は右手をスカートの下に入れた。腰に手先をまわしてズロースをおろした。ゴムのゆるいズロースは指先をかけただけで腿から膝へと従順に下がっていく。田端はそれを自分のズボンのポケットへねぢ込んだ。

もっともこれらの動作の全てがスムースにいった訳ではない。彼女は身もだえしたり、抵抗したりした。

「ノン、ノン」

と小声をだして彼の腕を押したときもあった。

すべすべした少女の体が闇の中でそうやって身もだえするたびに、彼の感情は昂まった。

彼女の腿に手をあてたとき、彼はシッポー・ダ・アグア（水のでる蔦）の切り口のようだと思った。森の中を歩いていて喉

が乾くと、シッポー・ダ・アグアを切って、その切り口からしたたる水を飲む。
彼はやにわにズボンをおろして体を押しつけた。そうして、暗がりのなかでマリアの体を抱きしめる。彼女は身をくねらせて男の攻撃を避けた。
無言で数回もみ合ううちに、何かただならぬ感覚が彼に炸裂した。もう止めようがなかった。
彼は二人が平衡を失って倒れないように彼女の体ごしにレモンの木を抱いていた。……気がつくと、両手は木の肌をしっかりにぎりしめていた。あまりにあっけなかった。
泥沼に足をとられて転倒したような感じだった。彼の分泌物はすべてレモンの木にかかっていた。
家の中からはまた陽気な音楽や床を踏みならす音が聞えていた。
二人は服を着た。それから、彼はなんとなくバツが悪い思いでちょっとマリヤの手を握りしめて、ひとりで家の方へ戻った。
家の外に背の高い女が立って、窓から家の中を覗いているのが見えた。

連載３７

（３）

カンテラの光をうけて女の顔は白く、闇の中に浮きでていた。

彼が近ずくと、
『クニ』
と言って女は笑った。
『今晩は、ドナ・スザーナ』
田端は挨拶した。
彼女は独身だが、女教師にはドナをつけて呼ぶのが習慣だった。彼女はエスコーラ・ルラル（僻地小学校）の先生だった。
『煙草もっている？』
『ええ』
彼は胸のポケットからオダリスカを出した。
『クニはいつもいい煙草を吸っているわね。この辺の男たちときたら縄タバコばかりで、臭くて頭が痛くなる』
スザーナはそう言いながら、彼が差し出したマッチの火に顔を近付けた。
向うをマリアの白いブラウスの影がスッと横切って家の中に入った。
『踊りに来たんですか？』
田端も煙草に火を付けてから訊ねた。
『・・・』
彼女は黙って首を振った。
『ファンタンゴ』の踊りはあくまでムチロン（助け合いの仕事）の一種だから、教師には無関係だった。退屈して

覗きにきたのだろう。僻地の教師は独りぼっちで、夜など何もすることがないのだった。一月に一度、月給をもらいに町に出たり、休みに家族を訪ねることだけが楽しみだった。

『もう帰るわ。クニ、送ってくれない』

煙草を指がこげるくらい短かく吸って投げすてると、スザーナは言った。

田端はマリアのことが気がかりだったが、

『ええ、いいですよ』

と答えてカマドの薪を取りに行った。　妹が学校へ行っていて父兄としていつも学校へ行くからスザーナとはわりに親しい。年は二十一の田端と同じくらいだ。

薪は急に一人ぼっちにされて不気嫌になったように、すぐ炎をあげるのをやめてしまった。黙って二人は歩いたが、オキだけの明りになるとスザーナの手がのびて田端の手にふれた。

『それ、捨てて……星がいっぱいよ』　薪は草むらに捨てられた。

彼女が下宿している家が黒くわだかまっていた。周辺は山地のこのあたりにしては平らで、向うにちっぽけな学校とカペーラ（礼拝堂）が建っている。

『クニ、あんたに煙草を返さなければ』

不自然な乾いた声だった。

『いいですよ』

『とりに来てね』

『ええ』
二人の声はだんだん低くなった。田端はゴクッと唾をのみ込んだ。彼の喉も渇いていた。
彼女の部屋は母屋とは出入口が別だった。ドアを開けて部屋に入ると、スザーナはマッチをすって、その火をランプに移した。女の影が壁に大きく映った。

連載３８
（３）

スザーナは芯をひねって炎を低くした。ポッリと赤い点になってランプはともっていた。
小さなタンスと机があるだけの簡素な部屋だった。ベッドは、カバーがかけられきちんとしていた。彼女は無言のまま、田端にも坐るようにベッドの端を指した。
並んで坐ると、彼女は向きなおり、彼の顔に両手を優しくかけて目をのぞきこんだ。彼女の黒い眸に赤い炎が映っていて、その炎がゆっくりと近付いた。
「あんたが好きよ」
吐息のように低い囁きの語尾は、田端の唇の中へ押しつけられた。
彼は手を廻して彼女の躯をうけとめた。柔かい唇の中からリスの尾のように舌がからんできた。
彼は接吻したまま、ゆっくりスザーナをベッドに押したおした。
彼女の胸をさすり、一つ二つと数えるようにボタンを

外す……。さっきマリアと抱き合ったばかりだから余祐があった。女の露わになった胸の動博が激しいのを、落ち着いて眺める余裕があった。

彼女はこの辺の住人たちより白い肌をしているしかし、純粋の白人の肌でもない。おぼろな光の中では吃立した乳首の色は桃色とも褐色とも見分け難い。激しい息づかいにつれて、風にゆれる樹のように乳房全体が上下している。柔らかな盛り上りだった。

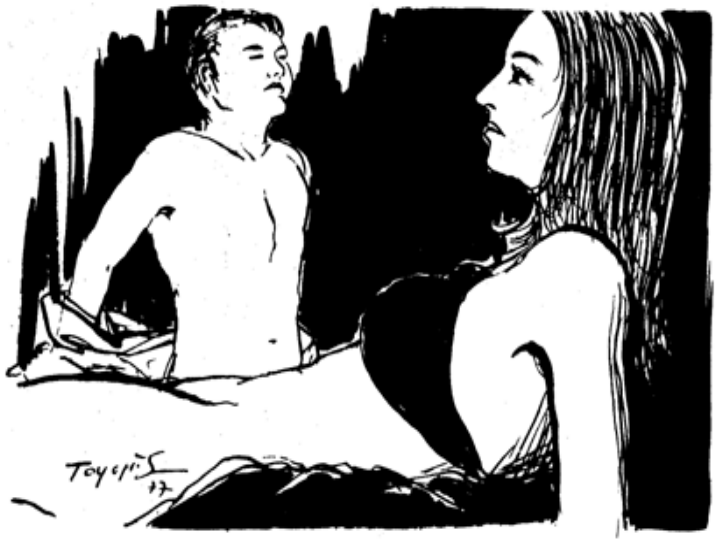
窓は閉じてあるのに、部屋のなかまで森の匂いが満ちていた。花が咲き、花粉が飛び、受精する匂いだった。森の壮大でのびやかな営為に、そこに住む女たちの体も包み込まれているようだった。

彼は大きく息を吸った。吸い馴れたこの匂い。この湿りけ。

「あんたが好きよ」

もう一度、スザーナが言った。

かすかにバイオリンの音が聞こえてきた。加山が弾いているのだ。甘いやる瀬ない音色だった。独りで寝ようとしていたスザーナはあのバイオリンの音色に誘われて外に出たのにちがいない。



森の匂いとバイオリンの響きに包まれて、雌の山羊のように欲情して歩いていたのだ。
＜この女を誘ったのは、本当は加山なのだ……＞
ふと、田端はそう思った。　しかし、いまはどちらでもいいことだった。田畑はだまってスザーナを抱きしめた。

連載４０

（３）

ペリキットの鳴声がやかましいので目覚めた。
ペリキットは小型の緑のオームで、いつも二十羽ほどの群をつくっている。熟れたパパイヤの実を狙って集っているらしかった。パパイヤなどいくらでも成る。どうせ人間が食べきれずに熟れているのだから、鳥がつついてもかまわない。　板壁の隙間から朝月が幾筋も差し込んでいる。
となりの加山のベッドは空だった。光線がちらちらして壁に幻燈のように人の姿が逆さに写って動いていた。
田端は床におりてのびをすると、壁に吊したタメルをつかんで戸外にでた。隣の母屋の屋根からは炊事の煙が青く流れていた。
「お早よう」
裏山の湧き水を導いた筧で顔を洗っていると、加山の声がした。
二人は川へコーボ（うけかご）を上げに、家の横の細

道を連れだって降っていった。
谷底はまだ霧が立ち込めている。木の根や岩を踏んで歩かないと素足が滑る。サラクーラが澄んだ声で鳴いて、谷一杯に声を響かせた。
「昨夜はどこへ行ったんだ？　帰りに探したぞ」
加山が前を歩きながら聞いた。
「うん。ドナ・スザーナを送って行って……」
「送って行っただけにしては帰りが遅かったぜ」
「・・・・」
「やったのか？」
加山は訊ねた。
田端は返答に困ったが隠しても仕方ないので、
「・・・・うん」
あいまいに返事した。
「いいじゃないか、気にしなくても」
加山は笑ったが、
「でもマリヤが怒っているみたいだったぞ。クニはどこか？　と俺が訊ねても返事もしなかった。女のお喋りに気をつけないと、噂の種になるからなあ」
と心配そうに言った。
「実はその前にマリヤとしたんだ。ところがあせってうまくいかなかった。それからドナ・スザーナを送っていっ

た」
　加山は振り向くと、
「嵐のときは港を選ばずというけどなあ、呆れたものだ。しかしお前、長生きできないぞ」
　とにらむゼスチュアをした。
　霧の底に白い水が流れていた。巾が四、五米の谷川である。イピランガ河という名だった。リベイラ河に合流するジュキア河の一支流である。
　谷底は湿地帯になっていた。海岸山脈のふもとの谷間なのに、この辺の湿地帯の海抜はたった十五米ほどにすぎない。肥沃な土地だがすぐ冠水するので利用できなかった　河はそれでもかなりの速さで流れていた。小川の流れ込みや、えぐれや淀みのあちこちに棒が立ててあって大きなうけが茶色く泥をかぶって沈めてあるのが澄んだ水を通して眺められた。

連載４１
（３）

　流れが巻いている処などには長さが二米ほどの小さな立網も仕掛けられていた。魚が掛っているらしくコルクの浮子が動いている。
　これらのセン（うけかご）や網は各自が数カ所に仕掛けてある。その場所は自然に決っていて、他人のうけかごをあげたり、魚を盗んだりする住人はいなかった。他処者などの姿をこの辺で見かけることもなかった。

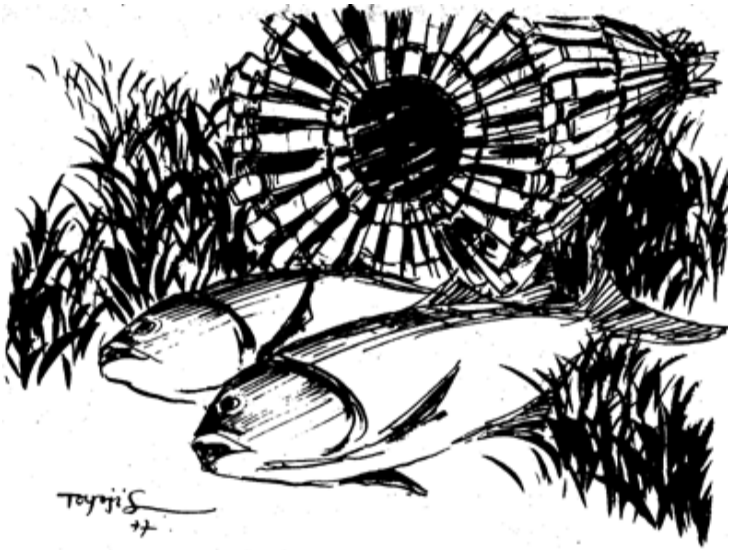
田端と加山は四ケ処にかごを仕掛けてある。長さが一米ほどの、このあたりでは平均的な型のだった。もうすこし下流へいくと魚もおおきくなるので一米半くらいの長さの、蔦であんだ竹篭になるのだった。

最初のかごは空だった。ニワトリの内臓でも入れておくと良く入るが、このところ餌なしで漬けてあるだけなので、よほど運の悪い魚が入るだけだった。

次のかごは場所がいいので四十センチほどのタライーラが二匹入っていた。一応、これで田端家の今夜の夕食のおかずはとれた訳になる。タライーラは鯉に似た魚体だが、習性は雷魚そっくりだった。鋭い歯でカエルや小魚を襲う。目が小さく、夜行性の魚だった。

葛であんだビクの中で黒褐色のうろこを光らせながら、タライーラは重々しく跳ねた。小骨は多いが、締った白身で美味な魚だった。

河沿いの細径を二人はさかのぼって第三と第四の籠をあげた。ナマヅと田ウナギが一匹ずつ入っていた。ナマヅも田ウナギも形は日本に棲むそれとほとんど同じだった。田ウナギは肉がポロポロして不味なので捨てた。



大体、二匹か三匹がこの辺の住人の平均した魚獲だった。それ以上獲つても仕方ないので、工夫をこらして多獲しようと試みる住人はいなかった。生け簀の魚をとりにいくように、毎朝コーボや小さな網をあげてかかった魚をとる。休日に遊びで釣りをする男もいるが、釣る数は知れていた。それでこんな小さな河でもこの辺の住人たちに一年中均等に蛋白質を供給しっつけることができるのだった。

田端たちにとっても、雨の日には竹と蔦でうけかごを作るのは大きな楽しみだった。川に漬けっぱなしなので割に早く痛んでしまい、大きな魚が入ると破られたりする。

田端がズポンのまま膝の上まで水につかって最後のかごを沈め直していると、加山が、

「おや？　あれは何だ」

と声をだして上流へ歩いていった。

そこはもう流れが早くなって、底も粗い砂になっている場所だった。水草の中に赤と黒のダンダラ模様の蛇が浮いている。しかし、加山の視線は蛇でなく流れの中心に向いていた。

田端が岸に上って眺めていると、加山は川底を透かして見ていたが、首をかしげながら流れの中へ入って行った。

連載４２

（３）

加山はかがんで流れの中から何かつまみ上げた。それは融かした鉛を水に落したような不規則な形をしていた。そして、黄色かった。

「ホラ……」

加山は仕細にそれを眺めてから、岸に立つ田端に渡した。一センチもない小さな塊なのに、それはズシリと重かった。

「……？」

彼は加山と顔を見合わせた。

「金……・」

「砂金だ」

ズボンでこすると思いなしか一層光りが加わったようだった。二人とも砂金を見るのは初めてだったが、金以外にこんな光と重さを持った天然の金属があろうとは思えない。この河筋とは外れるがリベイラ河の上流一帯にかって砂金がでた事は聞いていた。ただし、現在は掘り尽されたという。

「どのくらいの重さだろう？」

二人はかわるがわる掌にのせたが、五十キロ、六十キ

ロという農産物の袋の重さならすぐ言い当てられるが、小さなものの重さは不得手だった。五グラムくらいだろう、と二人はあやふやに結論した。
「このあいだの雨で上流から流れて来たんだろ」
「うん」
二人は山合いの上流を眺めた。霧はようやく晴れようとしていた。森の黒い影があちこちからのぞいていた。
「この河の上流にも砂金があるんだな」
「うん。こんどの休みに行ってみようか」
「よし行こう」
二人は頷き合った。

家に戻ると、朝食のテーブルに家族が並んでいた。田端は両親に十八の弟と十四の妹の五人家族だった。それに加山が加わるからこんな山の中でも淋しくはなかった。
昨夜の残りのご飯をラードで炒めて刻みネギを散らした主食に、ミソ汁と新香の朝食だった。お新香は青いパパイヤの実を一日ほど干してトウモロコシの粉に漬け込んだものである。ブラジルに住んでいても、自給自足に近い生活だから食事は自然に日本食が中心になった。
河辺に野生化して生えているアグリオン（オランダ芥子）も生のまま醤油とサラダオイルをかけて食べる＜日本風サラダ＞になった。野生のおらんだがらしは辛味が強く、信州人の田端一家はからし大根のようだと喜んで食べた。

ヤシの丸木を半割りにして並べた食卓に、加山のポケットから砂金の塊が置かれた。
「ほう。金か」
田端の父の文夫がまず手にとって、それから母のふみの手へ、
「金歯にしたら具合がいいだろうねえ」
ブラジルへ来てから歯が悪くなったとこぼしていたふみはそう言った。

連載４３
（３）

『上流にはもっと沢山あるにちがいない。こんどの休みに加山と行こうと思っている』
と田端は言った。
『そんなにあるものじゃなかろう。無駄骨を折ることもないぞ』
文夫はパパイヤの漬物をつまみながら不賛成らしく言った。
『でも、あるかもしれない』
『それより茶畑の手入れでもせんかい』
『あんな茶なんか売れないじゃないか。紅茶だか落葉だか作ってる本人が分らないんだから』

「・・・」
文夫はそれ以上、強くいう気はないらしく、
『まあ、行ったらいいさ』
と答えた。
田端の一家は桂植民地に入植して米を作りはじめたが、やっと開拓したのに二年目から地力がガタ落ちになった。深く掘るとピート層に当る。三年いたが見切りをつけて、上流のセッチバラス植民地へ移って来たのだった。
ブラジル柘植株式会社は他の移民会社と合併して海外興業株式会社と名を変えていたが、レジストロ植民地の更に上流に広大なセッチバラス植民地を売り出していた。リベイラ河にレジストロのやや上でジュキア河が合流している。セッチバラス植民地はジュキア河とリベイラ河に迫った山一帯に広がり、予定面積はレジストロ植民地の五倍あった。交通は河蒸気でセッチバラスの集落まで行けるが後は徒歩で起伏の多い山道を行くのだった。海興はセッチバラスにアルプスの観光ホテルのような医務局を建て、一時は入植者も盛んに入りはじめたが余りに不便なので殆んどがノロエステ鉄道線のコーヒー園地帯へ逃げだしてしまった。
ブラジルの事情が分らず、不便でも土地さえ良ければ、と思って田端一家は移ったのだが、失敗に気付いたときは第二次大戦が激しくなっていた。連合軍側のブラジルでは日本人は身動きができない。ここでその日暮しをしながら平和になるのを待つしかないのだった。

鬱屈した日々だった。
しかし、と同時に、牧歌的な日々でもあった。
サラクーラやサビヤの美しい鳴き声に囲まれて仕事をする。ブジュー猿の夕方に騒ぐ声や、遠くの峰の雲行きで明日の天候を知るのだった。土地の住人たちはこの上なくのんびりしていて、争いもなく盗人もいなかった
どの家も鍵などは掛けたこともないが、品物が無くなる心配はなかった

連載４４
（３）

雨がよく降る地方だった。海面で温められ湿気を含んだ風が、このあたりの山波にぶつかって雨を降らすのだった。
それは、暖かな、白い雨だった。邦三たちはたいがい素足で仕事をしている。メリケン粉の空袋を肩にかけただけで雨にぬれながら仕事をしても、風邪などひくことはなかった。
もっとも、雨だからと言って仕事を休んでいたら、この辺では仕事にならない。稲でさえ、降り続く雨のために立ったまま芽がでてしまうのだった。
夜、カンテラを点して雑誌を読みふけっていると、谷や峯を風や雨が渡る音が手にとるように聞えた。サッとものやわらかく雨脚が訪れ、やがてポタポタと屋根から落ちる滴の音が混じる。

その雨の音は柔らかく胸をしめつける。胸がときめくような甘い息吹きのように、邦三と義雄が寝泊りしている小屋を包むのだった。

彼らの小屋の裏にはユーカリの林があった。ユーカリを渡る風の音は淋しいが、静かに降る雨の音は他の雑木林のそれと比べてはるかに深く甘い音がするのだった。

深夜、その昔を聞いているだけで心が豊かになる想いがした。

加山の説明では、ユーカリの葉は細いから、他のはば広い葉の木ほど雨を溜めず、水滴が細かくて繊細な音調をかなでるのだろうと言う。そして木が高いから、深みと奥行きのある音に柔らかく拡がるのだった。

その音を聞いていると体のどこかでうずくようで、田端はふと目をあげて隣でやはり本を読んでいる加山の横顔を見たりするのだった。加山はページに視線を落したまま放心したように雨の音を聴いていた。音楽を聴いている表情だった。

母屋からは人声もなくもう父母や弟妹たちも寝静まっている深夜のような気配だった。時計をみると、まだ十時前だった　この辺の住人にとって石油は貴重品の最たる

もので、人々は夕暮れのほんの一刻、カンテラを点すだけだったから、田端たちのように、こんな時刻までカンテラを点して本を読むのは大変なぜいたくだった。

セッチバラスの日語学校の教師が夜中までランプを点していたというので父兄会で問題になったりしたくらいだった（学校の石油代は父兄の負担だった）。

『もう寝ようか』

あくびをしながら、田端は加山に言った。

『うん』

長塚節の『土』のページから目をあげて、加山は頷いた。その本は二人で何度も読み返して、暗記しているほどだった。

連載４５

（３）

田端が読んでいた雑誌は『キング』の昭和十五年八月号である。この雑誌はボロボロになっている。戦争が始まるすこし前から日本の書籍の輸入が停止したので、青年たちは本を貸し合って読むのだが、もともと乏しい本はすぐ読み尽されて、二度も三度も読んだ本ばかりだった。それでもあきずに借りたり貸したりして読むのだった。

二人とも鼻の穴が真っ黒になっていた。カンテラの乏しい光をひきよせて本に読みふけっていると、ススで鼻がたちまち黒くなる。

加山が田瑞と一つの小屋で寝起きしているのはそれなりの理由がある。
彼は叔父の家族の一員として、働き手の数を合わせるいわゆる構成家族で来た。田端の一家と同じように桂植民地に入ったのだった。しかし、叔父の娘が最近結婚したので、彼は独立することにしたのだ。
セッチバラスに田端たちの隣りの土地を買ったが、独りで開拓は無理なので田端一家の仕事を手伝いながら、少しずつ自分の畑を広げている。
田端がカンテラの火を吹き消そうとすると、加山も本を閉じながら、
「今日、海興の事務所で達っつぁんに逢った」
と言った。
中島達夫はレジストロ植民地の草分けの一人で、田端も顔は知っていた。
後に力行会の永田稠と共にアリアンサ植民地を拓いた輪湖俊午郎が、レジストロで一子を得たとき、中島達夫は猿の頭の丸焼きが産後の血の道に良いという話を聞いて、森へ猿を射ちに行ったことがある。
首尾よく一頭を得たが若かった達っあんは頭の丸焼きの方法を知らなかった。首をちょん切って布にくるんで輪湖の小屋へ持参したが、主人が不在だったので、
「あの、これ……」
とかモゾモゾ言って妻女に包みを押しつけて帰った。
輪湖の妻が薄暗い小屋の中で布包みをひらくと、恨し

そうに歯をむきだした猿の生首がゴロンと転がり出したので、彼女はキャッと叫んで腰を抜かした。

　そのために産婦は腰を打ったり熱を出したりして、達っあんの親切は反って騒動の種になったのだが、田端が彼について知っているのはそのエピソードくらいのものだった。

「あの人は古いから色々な話を知っていて、聞いていて面白かった。今日は森の言い伝えの話をしていて、金のとれる処には必らずなにか伝説があると言っていた」

　加山がいった。

「伝説というと？」

「峰に黄金の馬が棲むとか、黄金色の虹が一年に一回立つ場所があるとかそういう伝説だという」

「なるほど」

「それを聞いていて、思い出したことがあるんだ」

　と加山は言った。

連載４６

（３）

「ずっと前にジョンに聞いたが、裏の川を遡行して山が深くなったあたりに洞窟があって、そこに火の蛇が棲んでいるそうだ」

「火の蛇？」

「そう、火の蛇だ。その洞窟に入ったら火の蛇に殺される、とジョンは言った」

「ふーん」

田端はうなずきながら煙草に火をつけた。湿った味がする。雨は相変らず降っていて小屋のなかの空気も湿って重い感じだった。

「聞いたときは変った話だ、と思っただけだったが、今日の達っあんの話を聞いて、火の蛇とは黄金の精にちがいないと思いあたった」

「すると、その洞窟には黄金が隠されているのだろうか？」

「そう思いたい」

加山は微笑してうなずいた。

「あの川の上流はキロンボという地名だろう。キロンボとは逃亡奴隷の隠れ家の意味だ。日本で云えば隠れ里のことだ」

「なるほど。しかし、隠れ里というなら俺たちのいる此処が世捨て人のいる隠れ里そのものじゃないか」
「ハハハ。そうかもしれない」
　加山は笑ったが、すぐ真顔になって、
「その逃亡奴隷はリベイラの上流で砂金掘りをさせられていた連中だったかもしれない。だとすれば、逃げるとき、しこたま金をもって逃げたのかもしれない」
「地理的には合うなあ」
「逃げる方も必死だ。金など持ち逃げしたら捕まったら殺されるのだからね。首尾よく逃げおおせて、キロンボに隠れ住んだ連中は持って来た金をどうしたか？　自給自足の森の生活では黄金などさし当って不要だから、どこかへ隠したにちがいない。洞窟など隠し場所としては最適だ。・…何代かたつうらに埋めた砂金のことは忘れられ、伝説だけが残った。火の蛇が棲むという伝説だけがね」
「すると、この川の上流に火の蛇が棲むという洞窟があるのか」
　田端の問いに加山はゆっくり頷いた。
「ますます行ってみたくなった。しかし、上流へ行くには俺たちのカヌーでは大きすぎるなあ……」
　田端はそう言った。彼らのカヌーは下流のレジストロに農産物を運ぶもので、ここまで遡上するのがやっとだった。
「歩いていこう」

と加山が言った。
「イピランガ川の湿地帯は3キロくらい上流で終わっているはずだ。ここらの人間が猟にかよう小径をみつけて進めば川にでられると思う」
「そうするか」
田畑も同意した。この辺の住民は山刀一つでどんな処でも進む。径があるかどうかは気にしない。その話が一段落すると加山は、
「達っつぁんたちは日本の大戦果の話もしていた」
といった。
「えっ！　なぜ、それを先に言わない」
田畑は起き直った。
彼には、山の中の黄金の話より、祖国の戦争のことはより切実な話題だった。

連載47
（3）

遠い祖国の戦況はこんな山の中に住んでいる日本人たちにとっても、最大の関心事だった。みんな首を長くして戦況のニュースが入るのを待っている。日本人の話題は戦争のことが第一だった。それなのに加山は火の蛇の話の方が興味があるらしかった。田畑はちょっと呆れたように加山を見た。
……戦争が終ったら、なんとしても日本へ帰ろうと田端は決心していた。ブラジルで財産を得て帰国する夢は、

とうに捨てていた。人間の生活はどこでも同じだった。地球の反対側に来たからといって、一攫千金の旨い話など転がりていなかった。ただ生きるだけなら楽な国だったが、金を儲けるのは日本と同じようにむずかしかった。とくに、こんな辺鄙なところでは働くことが必ずしも収入につながらないのだった。なんのために故郷を離れて、異国の山中に住まなければならないのか、よく考えてみると辻棒の合わない話で腹が立ってくる。

桂植民地の話を日本で聞いたときも募集員は、

「向うではニワトリの卵など道端にゴロゴロ転がっています。ニワトリを飼うバカなどいなくて、卵を入れるカゴさえ持っていればそれで良い」

などと説明して、移住志望者たちを喜ばせた。本当にカゴを持って来た移民もいたのだった。

来てみると、たしかに鶏は放し飼いだったが、ちゃんと持ち主がいて勝手に卵などとったらドロボウである。

そういう他愛ない話でしか移住民を集められない係員に腹が立っているし、そういう話に乗った自分たちにも腹が立っているのだった。

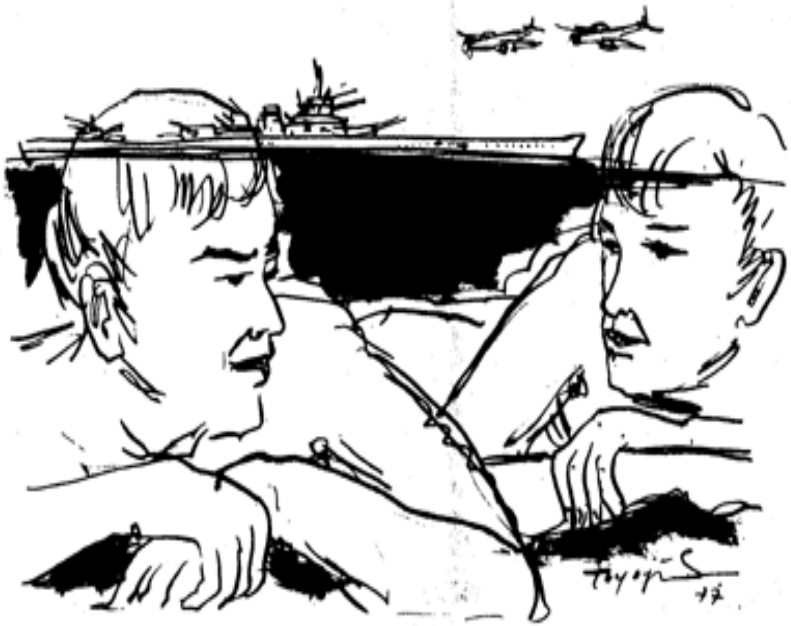
戦争が終ったなら、なんとしても旅費を工面して帰って、日本でやり直すつもりだった。

「それで、どんなニュースなんだ」

田端は勢い込んで訊ねた。

「サイパン島で激戦が行われているそうだ。我が軍はアメリカの大艦隊に大打撃を与えたそうだ」

「いよいよ瀬戸際作戦の効果が出てきたんだ」
田端は嬉しそうにうなずいた。戦術的な後退をして連合軍の補給線がのび切ったところで一挙に勝敗を決する作戦を日本はとっている、と一般に言われていた。誰もがそう信じていた。
「もう半年くらいで日本の大勝利だな。……戦争が終ったら日本へ一緒に帰らないか」
興奮して田端がそう言うと、加山は気のなさそうな表情で黙っていた。
「どうなんだ。義ちゃん……まさか、ここに残るつもりじゃないだろう」
笑いながら言うと、
「残ってもいいさ」
と思いがけない返事だった。
田端が呆れていると、加山はあくびをしてベッドに潜りこんだ。仕方なく、田端もカンテラを吹き消した。雨の音が暗い世界を包んでいた。



連載４８
（３）
日曜日の早暁、二人は砂金探しに出発した。

砂金を大量に掘り当てて儲けるつもりではない。単に青年らしい冒険心にすぎなかった。

目の細かいふるいと小型のクワをかついで、弁当を持った。万一の用意にマンジョカ芋の粉と干肉も用意した、これさえあれは幾日か野営をしても飢える心配はなかった。

携帯食としてこれほど便利なものはちょっと類がない。火もいらず、そのまま食べて水をのめばいいのだった。軽いし、幾日たっても変質する心配はまずない。それに乾パンなどとちがって続けて食べてもあきがこないのだった。

田畑たち日本人は自分の家でマンジョカ粉を作ることはしなかったが、この辺の住人たちは自分の家で毒マンジョカを水に浸けて青酸を抜き、それをブリキ板に穴を開けた手製のおろし機ですって粉をつくった。数株のマンジョカで一人の人間を養えれる、と言われるくらいマンジョカは手がかからず便利な作物だった。

五時に夜が白々と明けた。二人が辿っている山道には

すでに人家はない。細い径は狩りのためのものである。プレト河が流れている。目指すイピランガ河はその向うを並行して流れている。つまり、谷底の湿地帯を二本の川がそれぞれ山すそに添って流れているのだった。

川と川の間は森のような外観だが、凄い湿地帯でとても人間が歩いて入れる場所ではなかった。

これほどの山奥でありながら、湿地帯の海抜はたった十五メートル程度にすぎないのだ。いかに水はけの悪い土地かは、それだけで分る。うっかり踏み込んだら数メートルも進まないうちに足をとられ、手をとられて動けなくなるだろう。毒ヘビや蚊などの巣窟でもある。

二人の足音を聞きつけてカピバラが湿地帯に逃げ込む姿は時々見かけた。

この、ネズミのお化けのような地上最大のケッ歯類は水が好きなのだ。二人が近ずくまでキョトンとしていてそれから急にあわてて水に飛び込むのだった。　二人は汗だくになって山径を進んだ。もう三時間は歩いた。途中でプレト河の支流を渡ったが、五十メートルほどの沼のような場所で、下半身は泥だらけになっていた。右手の湿地帯は相変らず続いている。

汗をかくにしたがってブヨがうるさくつきまといはじめた。

連載４９

（３）

こんな筈ではなかったが、というように二人は顔を見合わせた。

昼食をとるために休んだとき、

「今日は帰れないかも知れないな」

と加山がいった。

「やはりカヌーで上った方が良かったかな」

「うん、でも来てしまったから、このまま進もう」

二人の下を、ようやく谷川らしくなったプレト川が流れている。イピランガ川との間に山のひだが割り込んでいた。

握り飯を腹につめると彼等は再び歩き始めた。坂をくだる。

加山の推定では砂金がある場所は向うのイピランガ河である。先日の金は、雨の降り具合でイピランガ河の上流だけが増水して、その水がプレト河に流入して運ばれたと加山は考えた。そうでなければ二人が魚を獲る場所でもっとしばしば砂金が発見されるだろう。

プレト河は谷底に巨岩が転がり、その間を清冽な流れが奔っていた。二人が石の上に立つと小さな魚影の群れが散った。

川を渡り、急坂を登り降るとイピランガ河に出た。プレト河より大きい。二人は岩を伝わって上流へ登っていった…。

この探険行で、二人が目指す砂金を発見できたかというと、答は否定的である。まったくなかった訳ではなく、滝壷へ潜ったりして約五グラムくらいの砂金を得た。

火の蛇が棲む、という洞穴を探したのだが、この辺には鍾乳洞が多いのだった。鍾乳洞が形成されやすい地質なのであろうが、二人が歩いた山だけでも幾つも鍾乳洞が発見できた。

人に荒されていないから、カンテラを点して入ると天井も地も真っ白に輝いて、奇怪な乳房状の鍾乳石が垂れ下り、床からは石筍がニョキニョキと起立している。奥の深さは見当もつかない。

もし、それらの洞窟のどれかに砂金が隠されていたとしても、二人くらいの人数ではとても発見はおぼつかなかった。十メートルも進むと、もう方向感覚が失われてくる闇の世界だった。

二人は洞窟に隠された砂金を探すのをあきらめたのだった。

こんな山の中でも、ところどころに人が住んでいた。夕方、二人はイピランガ河添いにポッンと建っている一

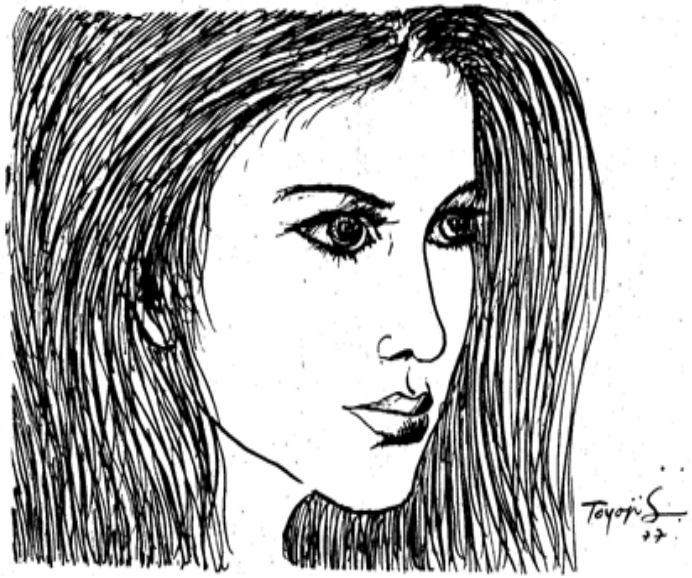
軒家に一夜の宿を求めたのだった。
その家の娘に加山は恋をした。

連載５０
（３）

彼女の名はイラセマといった。両親は土着のカボクロそのもので背もさほど高くなく、肌の色も浅黒いのに、イラセマは脊が高く青い日をしていた。二代前にアングロサクソンの血が混り、隔世遺伝で現われたにちがいなかった。

カナネイヤからイグアッペにかけての海岸の広大な処女林には、東京シンジケートの青柳郁太郎が辿りつく前に、同じような志を持った多くのヨーロッパ人が入ったのだった。

ドイツ人、オランダ人、ロシヤ人、そしてアメリカ人。彼等は例外なく植民地づくりに失敗し、敗退して、森は再びもとの静けさをとり戻したのだった。



地形的にみると、イラセマはアメリカ人の血をうけているらしかった。南北戦争後にヤンキーの支配を受けるのを好まなかった多くの南部人が海外に移住したが、ブ

ラジルには約三千人来た。
二人が砂金を探し廻った山からさほど遠からぬ処にも、かなりのアメリカ人が入ったのである。ほとんどの人々は数年後にカンピーナス近くの平原に移動し、そこにアメリカーナを作り定住したのだが、あくまで現地に残った人々もいた。多分、イラセマの祖父はそういう人だったにちがいない。

とまれ砂金探しから帰っての加山は毎週、彼女を訪ねて行った。イピランガ河を遡行した方が近いので、専用の小さなカヌーを作る熱心さだった。カヌーは方向性を得るために底の中心に筋を張り出したり、トモに垂直翼を出したりして直進を容易ならしめるのが普通だが、上流用のカヌーは底を平らでツルツルにしてしまうのが特長だった。馴れぬ者がこぐと、グルグル廻ってしまって仲々前へ進まないが、そのかわり横から急流を受けてもさほど押し流されず、水スマシのように自由に方向転換して進むことができる。そんな特殊なカヌーの扱い方にも加山はたちまち上達した。イラセマの処へ通う姿を遠くから眺めると土着の人間そのものだった。
彼等の仲がどんなふうに進んでいるのか、田畑には分らないが次第に家を空けることがおおくなり、しゅうに三日くらい向こうで過ごすようになった。
田畑たちが入植している処でさえ、すでに不便きわまる山の中なのだから、イラセマ一家が住む処は不便を通

り過ぎて、貨幣経済とはほとんどかかわりを持たぬ自給自足の生活だった。
金を費して買うものは灯油と火薬と布くらいのものだったろう。

連載５１
（３）

町へ持って行けば売れるものは山の中にはあるが・少量のものをカヌーで運んでもとうてい引き合う収入にはならない。砂金を拾って、それが貯ったら物資と交換する生活だった。
灯油といっても、夕暮れの一刻点すだけだし、火薬も普通の石弓（ブトッケ）を使っているからさほど要らない。石弓は粘土を丸めて陽に乾したものを飛ばす弓だった。矢をつがえる場所に粘土玉を挟む皮が張ってあって、弓をちょっとひねって射ると玉は弓に当らず遠く素速く飛んだ。
鳥や小動物を獲るのなら鉄砲を使わなくても、石弓で充分実用になった。そういう原始的で素朴な生活の中にのめり込んで行く加山の姿が、田端には移民としての目的を放棄したように見える。
議論をしたことも何度かあった。
しかし加山の言うことはいつも決っていた。
「人間として幸せに生きられればいいじゃないか」
という。

それには田端も同感だった。しかし、それから先の意見は別れた。

「都会ばかりでなく、森の中にも幸せはあるさ。そこに住む人々は無知のようだが、決してそうじゃない。実に多くのことも知っている。ただ、数学とか歴史などの学校で教える知識じゃないがね。森に住む人は無欲だよ。なによりも、謙虚になることを知っている。自然に対してね」

加山は目を細めて静かに先を続けた。

「人間的という言葉がある

だろ。あの言葉は、西欧の人間は万物の霊長であるという思想と結びついて、実にイヤな思い上った内容を与えられているね。人間は決して万物の霊長ではないよ、すべての生物は同じさ。植物も動物もね。つまり人間的という事は動物的という意味じゃなければならないんだ。人間は確かに知恵が進んでいる。でも、もし我々の廻りに頭がいいことを鼻にかけているような奴がいるとしたら、実に鼻もちならないイヤな奴じゃないかね」

そう加山は言うのだった。
田端は反論した。
「それは理屈では確かにその通りだが……しかしやっと人間は文明を作りだしたのにその恩恵を捨てゝ、何も好きこのんであんな処に住まなくてもいいじゃないか」
「ああいう処の方が俺は生甲斐を感じるんだから仕方ないさ」
「でも病気にでもなったらどうするんだ。医者もいない処だぜ」
「ここだって似たようなものさ」

連載５１
（３）

「まあそうだが、しかしいざとなればセッチバラスの医局まで連れて行けば何とかなる。あんな山の中では助かる病気も助からないだろう」
そう田端が言うと、
「俺は近頃、死を以前ほど恐れなくなった」
と加山は答えた。
「勿論、助かるものなら助かってなるべく長生きをしたい、とは思うさ。しかし、それ以上に、自分の身体は自然の一部である、という気拝が強くなったんだよ。自分という個体が死んでも自然の中で形を変えるだけで、地球が存在するかぎりいま自分を形成している組織は生き続ける訳だ」

「そんな事は誰だって知っている」
「知識としてはね。しかし、これは実感だよ。自分の体が自然の一部にすぎない、という実感が森の中に住むと湧いてくるのだよ。自然と交感している部分が多くなる。それだけ個性の分野は減るかもしれないけど、死を街に住む人ほど恐れないだけでも、森に棲む者たちは幸せじゃないかね」
「・・・・・」
田端には加山のいうことは理解できなくもない。しかし、実際に自分が森の住人になれるかというと、(現在の自分は都会人からみれば森の住人のように見えるだろうが) これから金を儲け、人間的な生活を手に入れようとする希みを放棄してまで土着化しようとする意志はない。

結局は気質の違いであろうが、この畑をたがやし、移民として成功する努力を加山と共に続けることを、田端はあきらめざるを得なかった。
第一、田端にしてからが、このセッチバラス植民地で畑を耕やし続けることに何の希望も持っていないのだった。

只ほど高いものはないという諺があるが、海興が州政府から無償交付をうけたこの広大な山地は結局は、入植者たちが苦労に苦労を重ねなければならない羽目に陥ったのだった。しかも、実りの期待できない苦労だった。コケの一念でこの山間の痩せ地にしがみ付いて働いたとしても、広大な大農場がひしめくブラジルの市場で生産性の上からとうてい太刀打ちできるはずがない。近くに都会がないから、換金作物は輸送が利くものでなければならない。コーヒーを作っても茶を作っても品質劣悪のレッテルが貼られるのだ。

第二次大戦のために絹の価が高く、田端たちも養蚕でどうやら収入を得られるが、それとて奥地の条件のいいバストスあたりの日本人移民が、五十メートルくらいの蚕舎をいくつも作って盛大にやっているのに比べたら、とうてい話にならない小規模だった。

連載５４

（３）

ある日、田端はカヌーにマユを積んでレジストロへ売りに行った。いつもは加山と二人の旅だが今日は弟の明を連れていた。

プレト河の細い流れを降ると、すぐイピランガ河と合流する。冬の乾水期なので時には降りてカヌーを押さなければならなかった。やがてジュキア河に出る。それから，リベイラ河……。降りは半日の旅だった。

レジストロには小さな製糸工場があって、持っていけばすぐマユを買ってくれた。
田端がマユを持ち込むと、
「安いが、いいか」
と購入係りの男が念を押した。
「安い？　どうして急に安いんだ」
田端が首をかしげると、
「戦争が終ったからさ」
当然だというように男は言った。
「えっ」
田端が驚くと、
「なんだ。知らないのか日本は敗けたよ」
と投げだすように男は言った。
「敗けた？　まさか」
「本当さ。きのう、戦争は終った」
そういったきりで、男は面倒くさそうに、彼がいろいろ質問しても、あんたの同胞に聞けというばかりだった。
受け売った金は今迄の値の半分だった。特需景気が終わったのだということだった。
田端は足がなえるような思いにたえながら、事務所の建物をでた。
冬とはいえ、リベイラの日射しは強い。日光の直射に

さらされながら田端は日本人の姿を求めてフラフラと歩いた。

その夜、二人はカヌーに寝た。いつもならペンソンに泊って人里の雰囲気を体一杯吸収してくるのがレジストロに出る楽しみの一つなのに、このマユの安値ではペンソン代すら払うのが惜しかった。もっともっとマユの値は下るだろうという話だった。文字通り暴落するらしい。

日本が敗けたのは事実らしかった。本土は米機の空襲で文字通り焼土と化し、食料不足も深刻らしかった。

冬で蚊が少ないので何とかしのげたが、小舟の中の寝苦しい一夜が明けた。パンを買い、それをかじって河の水をすくって飲んで夕食にしたのだった。

夜が白むと、田端はカヌーを漕ぎだした。

遡上するときは擢よりも棹の方が楽なので、カヌーは岸すれすれに進む。棹をついて舟を押しながら、不意に、田端は泣いた。

連載５４

（３）

祖国が敗けたことが悲しかった。と同時に、戦争が終ったら日本へ帰って再出発しようとしていた自分の前途も消え去せたのだった。

カヌーの舟影に驚ろいて大きなスズキが跳躍した。波紋のよこを舟は滑ってゆく。

日が昇ると、心の悲しみとは無関係に、田端の顔から汗がしたたった。

彼はもう泣いていなかった。虚ろな視線で河岸の風景を挑めながら機械的にカヌーを押した。一日の長旅である。何も考えずに機械のように舟を漕がないと途中で疲れ果てしまうことを、彼は経験で知っていた。

しかし、間歇的に敗戦の悲しみが胸を横切る。

へさきに立って竿をあやつる弟の明も、力なくうなだれて漕いでいた。まだ、か細い少年の腕をしている。うなじも細かった。その後姿を眺めているうちに、「済ない！」と大声で弟に詫びたくなった。

海外雄飛の夢にうかされた田端が中心になって家族はブラジルに来た。半年振りに町へ出ても、安下宿にさえ泊ることのできない生活を今だに続けている。自分はいいとして幼なくして連れて来られた弟や妹が不憫だった。

河は広く、蛇行していた。左手に大きな農場が見える。専用の礼拝堂を持って美しい農場だった。その曲り角にジュキア河が注ぎ込んでいる。

カヌーがジュキア河に入ると、それまで牧歌的に広

がっていた河岸の景色が一変して、森が両岸にのしかかった。この辺の標高は低く水はけが悪いので雨期には水没する。住む人さえない原始の森だった。
わずかに河岸の高所にへばり付くように人家が見えたりする。
いつもは見馴れた景色が、その日の田端にはひどくうとましかった。
「サンパウロへ出よう」
電光のような決心が、彼の心に固まった。
都会の生活も苦しいにちがいない。しかし、日本が負け、帰国の夢が消えたいま、この国に住むしか移民の行き場所はないのだ。この国に住むとしたら、この国の学校を出なければ成功はおぼつかない。
夜学でいいから、勉強しよう。このままでは自分より、弟や妹たちが可哀想だった。中途半端な人間になるのは目に見えている。
これから夜学でコツコツ学ぶとすると、彼が一人前になれるのは四十近くなってからに過ぎない。それは辛い認識であったしかし、他に道はなかった。
「おい、明。サンパウロへ出て勉強しよう」
櫂を使いながら、田端は弟に声をかけた。明は振向いた。
「日本は敗けたんだ。この国で勉強するしか俺たちの道はない。どうだ、明」
「うん。兄さん」

弟は大きく頷いた。
「これからの方が苦しいぞ。兄さんを助けて頑張ってくれ」
また嗚咽がこみ上げそうで、彼はそこで言葉を切って大きく櫂をこいだ。

連載55

第四章

旧・桂植民地、ジプブーラの柳沢パウロさんに別れをつげて、私はレジストロに遡る船に乗った。
自動車道路が発達した現在でも週に何便かの連絡船が出ているのだった。
桂植民地が開けた頃だって船は毎日出ていた訳ではなかった。大正十四年（一九二五）の時刻表をみると週五便となっている。終点のジュキアからサントスへ連絡する汽車も週五便なので釣り合いがとれていた。
汽車はジュキアからサントスまで約七時間の旅である。今の自動車道路だと、時速八十粁で走っても二時間とからないから、随分悠長な走り方の汽車である。
私もこの汽車に何度か乗ったが、裸馬に乗った少年が汽車を追い越して走るのである。
数年前に途中の坂で貨車が外れて暴走した事故があった。貨車はイタリリ駅の辺から走りだし、平地のアナジアス駅を過ぎてやっと停ったのだが、アナジアス駅の駅

長が、
「汽車があんな速く走るのを見たのは初めてだ」
と盛んに感心していた。
今でさえこんなノンビリした走り方をする。当時は駅でなくても手を挙げれば停車してくれたそうだから、遅い汽車が更に遅くなっただろう。ついでに当時の汽車の時刻表をみると、一週五本のうち二本は到着時刻が（予定）と書いてある。
最初からいつ着くのか分らない汽車では随分不安だが、連絡船もその日は無くて翌日出発、となっているから辻複は合っている訳だ。しかし、連絡船がないから汽車が気ままな旅をするのか、汽車の時刻がハッキリしないので連絡船がなかったのか、その辺は分らない。
その遅い汽車でさえジュキアが終点で、青柳らの懸命な努力にもかかわらず遂にレジストロまでは延びなかった。
ついでに記せば、英国系の会社の経営だったジュキア鉄道線の敷設工事には登戸丸移民たちが多数働いている。彼等のほとんどは沖縄県出身者たちであった。
コーヒー園を逃亡したとき、内地人はサンパウロ市に出てきて大工になったり下男になったりしたのであるが、

沖縄県人たちは一気にサントスまでやつて来た。そこに海があるからだった。

日本がそもそも島国であるが、沖縄の島々はさらに小さい、文字通りの島である。故郷のイメージは具体的で鮮烈である。その故であろうか。日本人の中では沖縄諸島の人々が最も強い郷愁の念を持っていた。サントスに辿りついた人々は海を見て慰さめられ、そして泣いたにちがいない。

人々はここでドック人足や郊外の野菜作りになった。

連載56

（4）

港町のサントスで募集された鉄道工事人夫に応じた人々が、貰った給料で土地を買いジュキア線沿線の米つくりとして定着したのだった。

サントス～ジュキア間の鉄道はペルイベまで海岸を走り、それから右へ曲り海岸山脈に分け入ってジュキアに至るのだが、時代の流れからは無縁のような山間の産業も米ー木炭ーバナナと時代と共に移っている。

私はジュキア鉄道の汽車の遅いことを書いたが、遅いなりに人々の生業を支えていたことを書き添えなければ片手落ちになるだろう。

例えば、ガスが普及する前は木炭の時代でサントス市だけで百軒以上の木炭仲買店があったそうだが、山間で炭を焼く人は馬の背に炭をのせて線路に運ぶだけで良

かった。そして、駅が発行する貨物の伝票が現金と同じ信用を持っていた。伝票を仲買店に持参すれば、そこに記入されている数量だけの現金が即座に支払われた。

もっとも、いい話ばかりでなく、薪をたいて走る汽車の火の粉が貨物の炭について、荷主が蒼くなって燃えながら走る汽車を追っていったこともあった。

それに、当時の商業道徳はひどいもので、これ以上は詰らないほど棒で叩いて炭を袋につめないと、仲買店は受けとらなかったそうだ。仲買店はそれを詰め替えてガサガサにして小売店へ発送するのである。

レジストロの穀物仲買商にも「売り升」と「買い升」の二通りの升があったという。二つとも外見はまったく同じだが、「売り升」という升は四八キロ入りで「買い升」は五〇キロ入る。

こういうことは、商人だけでなく労働者の方だって苦心して工夫した。コーヒー収穫の出来高を量るときもなるべくソロッと容器に入れたそうだ。コーヒー豆をフワッと盛るなどむずかしそうだかとにかくそうすると量がふえる。

田舎で食事をごちそうになって、その家のお婆さんが

フワッといかにも旨そうにご飯を茶椀に盛ってくれると、「アレッ、この人、昔コーヒー園でやってた人じゃない？」と私は思ったりする。

私が乗った船はさして時間もかからずにレジストロに着いた。以前のように外輪車を廻して進む河船ではない。速くなったが、情緒もないのは仕方なかった。

かっての海興の赤レンガの建物の下に舟着場があって、私は船を降りた。

連載５７

（４）

レジストロの指導的な人物の山本さんに会いに行ったが不在だった。サンパウロに行っているそうである。

ホテルに荷物をおいてから、薬局店主の中川さんを訪れた。その夜は中川さんが食事に誘ってくれた。

彼は井伏鱒二そっくりの人である。顔も体つきもそっくりだ。飲むと盛んに笑うようになる。夜が更けるにつれ、とめどなく笑うようになる。酒飲みとしては上の部で、何の芸もなくロレツが廻らなくなる私などとは雲泥の差がある。

翌日から私はいろいろな人

に会って話を聞いたが、主に松村栄治さんの家へ行くことが多かった。

レジストロでは入植六十五年を記念して、山本さんを中心に詳細な植民地史の刊行を準備している。今年中にも本は出る予定だから・重複を避けてここではレジストロ史に立ち入らないことにする。

松村さんは明治二七年長野県北安曇郡の出身でいかにも長野県人らしく理路整然とした話し方をする。

安曇郡というと、私は社会想家の木下尚江や彫刻家の斉藤緑山、最近の人では評論家の臼井吉見の名くらいしか知らないので話題にすると、白井吉見の近況まで私よりよく知っていた。

松村さんは大正六年（一九一七）に入植したから最初期の一人だが、後に海興がセッチ・バラスに手を拡げるときには猛反対したそうだ。

農民にとって最も大事なことは、政府が土地を只でくれるかどうではなく、土地が肥えているかどうかだった。

一見、無限の緑を敷きつめたようなリベイラの森も、土地のいい処にはちゃんと人が住んでいたという。彼自身、自分が入植した土地が悪くて隣の土地を借りて米を作った。たとえ金を払ってもいい土地を手に入れた方が結局得だ、と身にしみて実感していたから、セッチ・バラスではなくパリケーラ・アスーの方へ植民地を延した方が将来性があると主張した。

海輿の現地職員の中でも同じ意見の持ち主もいたかもしれない。しかし日本に本社を置く海輿という組織は結局セッチ・バラスを選んだ。組織と個人の問題は今も同じだし、まして交通の不便な当時の事であった。今さらとやかく言っても仕方ない。しかし、結局は最後の帳尻が移民一人一人の肩にのしかかってきた、とは言える。

連載５８

（４）

青柳がブラジルに来る時、杉浦重剛が尺余の鉄扇に「鉄骨仁風」と書いて餞別とした。

これは開拓地の指導者にいかにもふさわしい言葉のように見える。この言葉の通りにやったら全ての困難を排して理想境を建設できそうである　だが、落し穴はまさにそこにある。この短かい言葉は思想というよりむしろ一種の気分、情緒に近い。実際の植民地の生活は、クギが足りない、道が悪い、米が安い……実に散文的な出来事の集積にすぎない。情緒の入り込む余地はないのだった。

「海外雄飛」も「鉄骨仁風」も日本にいて遠く海外に夢を駆せているかぎり生きた言葉だった。しかし、現地に着いて開拓に着手すると、それらの言葉はほとんど意味を失い、風化してバラバラに崩れてしまうのだった。

かわって登場するのが、ブラジルの大自然である。大和言葉も漠語も、このまったく異質の自然に対する言葉

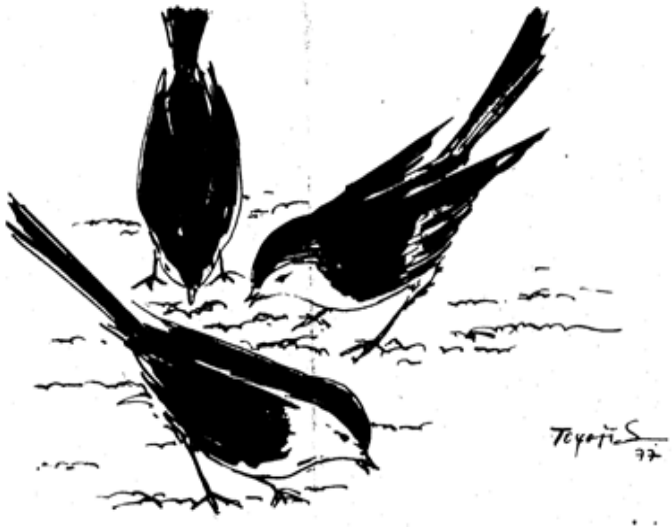
さえ持っていなかった。

松村さんに聞いた話だが、入植して稲を蒔くとき、鳥に荒されないように棒で穴を掘ってモミを埋めたそうだ。すると必ず鳥が穴をほじくって、モミを食ってしまう。鳥に荒されない方法は土着のカボクロ式に、地表にパラパラとモミをまいてあとから雑草を刈って散らしておく、といいそうだ。

私は初め不思議だった。穴をほじくるほど知恵のある鳥が雑草の蔭のモミを発見できない筈はないと思ったのだ。

考えた末の私の推論はこうだ。

鳥は自然の調和の中で生きている。生態系のバランスを破らない行動を本能的にとる。植物が根絶やしになっては彼等は生きられないので、自然の状態で発芽を待つモミは食べないのではないか。それに反し、道に落ちているモミ、乾してあるモミ、埋めてあるモミなど不自然な状態で存在しているモミは食う。



勿論、鳥はまだ穂についているモミを食うし、地表に露出しているモミもついばむ。しかし、再び稲が生えて次の実りを得られるように、どこかで採餌行為にブレー

キがかかる。それが、草の葉におおわれている状態ではないのか？　そう考えるのが、最も説明し易いと思える。

今日では生態学が発達しているから私のような素人考えは見当違いかもしれない。だが苗代を作り、鳥を追いながら苗を育てた日本の稲作には、かって存在しなかったタイプの自然と人間の関係がここにはあった。

「権兵衛が種蒔きやカラスがほじくる」という唄は残っている。しかし、開拓という行為が大規模にはもはや存在しない日本国内では民族の記憶はそのあたりで途切れている。

連載５９

（４）

植民地が建設されるまでは政治的な力関係で人は動く。だが開拓が始まると、開拓者と自然との関係が四辺を包みこむ。

開拓者は森を伐り、種をまく。このきわめて当然な行為と疑わなかった行為は、しかし、入植一年目の頃に重大な難関に逢う。疑人化した言い方をすれば、森が、「お前たちは私と闘うつもりかね。それとも平和にやっていくつもりかね」という問いを発していることに気付くのだ。

多くの人はその問いを無視して、やみくもに耕す。そして、数年後に力尽きてヘタヘタと土に坐り込むのだ。

入植者の数が少なければ、人はいつのまにか自然と闘

う意志を放棄し、共存を選ぶようになる。森は常に平和を要求している。それも、非常に強い力で一生物たる、そして侵入者たる入植者に働きかけている。私がここで言っているのは、最近の「自然を保護しょう」とか「公害をなくそう」とかいった類の、愛護運動的な考え方ではない。自然そのものが持っている調和を維持しょうとする力の強さについてだ。

入植者たちは雑草をとり、田を耕してそこに苗を植えることをやめ、自然が命じるようにただ地表にモミをまくだけになる。

植民政策からみると、これは失敗であり明らかな退行現象だろう。ブラジルの一角にドイツ式植民地を建設しょうとした桂首相、邦人の手による安定した米の供給地を求めた大浦農相、それらの政治家たちの希望を拒否してリベイラの自然は自己の調和を守る力を最大に発揮したのだった。

入植者たちは日本から持って来た進歩した農具をすてて、土地伝来の素朴農法に同化してしまった。

桂首相は知らなかったが、日本人たちが入植した地帯

のもう少し山奥にかってドイツ人入植者の一団が放棄したトラクターや大農具類が赤く錆びついて森の中にねむっていたのだった。ドイツ人たちも退行したのだった。

きわめて皮肉な言い方だが、リベイラの森にドイツ人と同じものをつくろうとした日本の指導者の意図は、たしかに実現されたのである。

数日後に、私は更に川を遡ることにした。

レジストロに滞在している間に車で川添いに走り、セッチバラスの集落まで行ってみた。セッチバラス入植地といっても、かって田端や加山が入植した処はセッチバラスと名のつく集落から更に山を越した処だった。それで、レジストロへ戻って舟でのぼることに決めたのだった。

レジストロで松村さんの家へ行くと、やはり柳沢さんのピンガがでる。松村さんの娘がパウロさんの妻なのだ。

人と会わない時は私は川の畔で時間を過ごした。豊かな川だった。川風がピンガの酔いをさましてくれた。

連載６０

（４）

先にも書いたようにリベイラ河はほぼ利根川の規模の川である。このくらいの川の大きさが、日本人にはピッタリする。

アマゾン河やラプラタ河は川のたたずまいに馴染むまで一週間位かかる。しかし、リベイラ河なら一目見た瞬

間、ああいい川だなあと思えるのだった。
ピチャピチャと銀鱗が河岸から十メートルはどの沖を帯のように跳ねている。マンジューバが遡上しはじめているのだ。
岸に坐り込んで雑談にふけっていた漁師がハネを見てカヌーに乗り込む。高さが一米ほどの長い浮網でハネの廻りを囲んで網をあげると、柳の葉のような白い魚が網にちりばめられている。
「早く、早く」
私は岸に立って、彼等をせきたてる。奪うようにしてマンジューバを買い求め、私は宿へ一目散に戻る。マンジューバは岸から三十米離れると、もう味がおちると言われている。残念なことに宿まで百二十米くらいあるのだった。私は台所へ飛び込んで、まだ透き通っているマンジューバを三枚におろし、酢でさっと洗う。
皿に並べると皿の文様が透き通って見える。花の絵の赤がにじんでいる様子など、この上なく美しい。
一片を口に入れると、自分の存在が味覚だけになってしまったようだ。自分が立っているのか坐っているのか

さえ、ハッキリ知覚できない。
マンジューバは陸封されない隆海性のワカサギのような魚であるが、産卵のため淡水に遡上するいまごろはきわめて上品な、しかし変質しやすい脂肪分に富んでいる。
捕ってしばらくすると透明だった魚体がこころもち黄ばんでくる。もう脂が変質しだしたのだ。淡白さだけはわりに残るが、ごく当り前のお上品な味にすぎず、もう心までとかしてしまうあの味は消えている。本の上に三枚におろした切り身をおいて、下の字が読めるくらいなら旨い。素晴らしく旨い。
……私はしばしばマンジューバの美味について言及してきた。刺身、酢のものと、それが極めて日本的な味だからである。
このあたりは南回帰線が通っているから、熱帯ではないが、海抜が低いために暑さと湿度は濃密である。気候は熱帯そのものだ。森も熱帯雨林と呼べる。ただし、アマゾン地方ほど木は高く成長しない。更に現在は再生林がほとんどだから森の木はもっと低い。このことは入植当時の写真をみても分るし、海岸添いに北上して山を越し、まだ未開のウナ地方の盆地に足を踏み込むと理解できる。
このような熱帯でありながら、山にかかる霧といい利根川のような川といい、マンジューバの味といい、すんなりと日本を感じさせる場所は日本人の入植地としてほかに例がなかった。

それとカイサーラ（海岸地帯の土着人）の人の好さが加わり、イグアッペ植民地の日系人には一種独特の牧歌的な気風が生じた。

連載６１

（４）

本格的な漁期はまだなので私が河岸に佇んで待っていても、マンジューバの群はめったにやって来なかった。入植当時はザルでいくらでもすくえたという話は過去のものになった。

日本人漁師の岩雄さんの両親はここでマンジューバ加工工場を経営していたそうだ。そういう工場は沢山あったらしいが今はほとんどない。

岩雄さんも漁師ではあるが、いまは持ち船を利用しての運送業が主になっているようだった。

岩雄さんのカヌーに乗って、私はいよいよ川を遡ることにした。田端や加山たち、かってセッチバラス入植地の奥に入った人々はカヌーにモミやマユを乗せてレジストロまで降ってきたのだった。

朝、起きぬけにコーヒーをのむと、私は河岸へ向つて歩いた。前日に買ったパンとカンヅメと水の紙包みを右手でかかえ、左手に吊げた旅行のカバンにはカメラ、ノート、着換え、釣り具などが入っている。万一野宿してもいいように防虫クリームと蚊取り線香も用意した。

太陽が出たばかりの時刻だった。朝モヤの残った川面

には魚のハネが見られた。フッコかボラらしかった。
草っ原の径を下りると、少しばかりの砂が露出していて、岩雄さんのカヌーが岸に半分引きあげてあった。私は荷物を舟に積んだ。カヌーといっても十人くらいは楽に乗れる大きさだった。
煙草を吸って待っていると岩雄さんがガソリンの赤いタンクを肩にかついでやって来た。
「もういいかね」
私がうなずくと、彼はカヌーを押しだした。
船外機のヒモを引くとすぐに点火して、スクリューが廻りだした。十五馬力の船外機はこの他の地方ではあまり見ない型である。スイス製とのことだった。
ジプブーラのパウロさんもこの船外機を使っている。不格好だが性能がいいとパウロさんが自慢したら、なぜかエンジンがとまってしまった。上げ潮だったもので海からの風に吹かれて上流へ二キロほど流された。どうしても点火しないので遠くで舟を停めて釣りをしている人に向って、「オーイ、オーイ」と救助を求めた。

釣りをしている人が錨をあげて、近ずいたとき、パウロさんがもう一度紐を引くと、

パッパッパッ

とエンジンが始動した。釣りをやめてわざわざ助けに来た人はガッカリしたような顔をし、パウロさんはバツが悪そうな顔をした。

連載６２

（４）

カヌーは軽いエンジン音を河面に拡散させながら、上流へ向った。

新しい鉄橋の下を通った。汽車の線路が延びるらしい。鉄橋の下で釣舟が一隻もやって、糸を流していた。カヌーはそのよこを通り過ぎた。

このカヌーの大きさに十五馬力のモーターでは決して速くはない。両岸の風景はごくゆっくりとしか動かない。しかし、時に手漕ぎのカヌーを追いこすと、やはり速さがちがうのだった。手漕ぎのカヌーは岸辺にべったりと貼りついているようにしか見えない。お互に片手を挙げて挨拶

を交したとみる間に、私たちと小舟の距離はどんどん広がっていくのだった。

田端たちキロンボの入植者たちは手漕ぎのカヌーに収穫物をのせて、二日がかりでキロンボとレジストロを往復したのだった。そのレジストロさえ不便な処で、サンパウロに行くに三日かかった。往復するだけで一週間は要する。

そんな遠いので（今の国道なら百八十五キロにすぎない）、当時サンパウロ市に出る人は少なかったようだ。たまに行くときは、背広や靴などを持っている人に借りて身につけたそうだ。上衣、ズボン、ネクタイ、靴、と持主が全部ちがう品を身につけるのだから、ひどくチグハグな服装だったと思える。

カヌーが町から離れると、左手にちょっとした山が見える。海抜百五十メートルくらいの突起が青くかすんでいる。それが、かの有名な「レジスト富士」だった。そのあたりは山道ばかりで入植者泣かせの場所だったそうだが、今は茶畑が多い。

川の中に岩がいくつも出ている大曲りにさしかかった。植木さんという人に連れられて、ここでフッコを釣ったことがある。流れが当って渦巻き、深く河がえぐれている。

その大曲りを過ぎると周囲の風景が広々とした。左岸はバナナ園が続いているが、右岸は草原になったからである。牛がのんびり草を喰っている。

ずっとそんな風景が続く。日は高く昇り、熱くなった。厚手のシャツを脱ぎTシャツになった。

右手のバナナ園が途切れて広い牧場が展けてきた。農場の中に教会の塔が屹立している。河巾も広くなった。そこがリベイラ河とジュキア河との合流点だった。

連載６３

（４）

リベイラ河の水はかなり澄んでいる。その白っぽい水に紅茶色の水が右側から注ぎ込んでいた。カヌーがぐるっと廻るとリベイラ河の半分くらいの河が赤土の崖にはさまれて現われた。

合流点は大きく流れが巻いてゴミが集っている。そのゴミの廻りで片口イワシが盛んに跳ねている。銀鱗を朝日にきらめかせていた。ここまでイワシが遡ってくるのだった。

カヌーは速度をあげてジュキア河の黒い水に突っ込んだ。

水は紅茶かコーヒーのような色をしている。ということは、上流に湿地帯をひかえているということだった。水中の落葉が腐って色素（とくにタンニン）が融けて、水が黒っぽくなる。

リベイラ河を遡ったマンジューバはジュキア河には入らないで、本流を遡るそうだ。従って、それを追うスズキも大半は本流を遡る。なぜマンジューバがジュキア河

に入らないか、その原因を私は知らないが、黒っぽい水は落葉が腐るとき酸素もとられ、やや酸素が足りなくなり、そして酸性になりやすい。そのせいかもしれない。

のんびりと広げた牧歌的なリベイラ河から入ると、ジュキア河の両岸はうっそうと木が繁り、暗い感じを与える。

堂々たる森でありながら雨期には冠水するので利用する者がいない。私が眺めている景色は、入植初期の頃と同じだろうと思われる。処々にポッンと家がある。河岸へおりる細径がつけられ、一本の杭が立ってカヌーがつながれている。家の廻りには小さなマンジョカ畑がある。庭には裸の子がいたり、赤いスカートをはいた女がこちらを眺めていたりした。

処々に細い小川が流れ込んでいる。そういう処には必ず杭が立っている。うけかごがしかけてあるのだ。小川の流れ出しには小魚が集っていて、時に、大きな魚が食事にやってくる。それをかごでとる。

場所は自然にきまっていて、他の人が勝手に仕掛けたりはしない。マンジョカ芋とバナナと魚と鳥で、河

辺の住人たちの一応の食生活は保証される。それらはほとんど自然にとれるものばかりだ。マンジョカとバナナは植えっ放し。魚と鳥はワナにかかるのをとるだけだ。つまり、食うだけだったら、働く必要はない。これは人間の生活の原型だろう。私はそういう生活に興味がある。自分が怠け者のせいもあるが、そういった単純な原型の生活へ、こうやって河を遡るように遡ってみたいと思うことがある。

連載６４

（４）

歴史の教科書のさし絵などみると、縄文だの弥生だのの初期の農耕民族がいかにもいそがしく立ち働いていたような図が描いてあるが、太古の人がそれほど働いたとは思えない。冬がある地帯ではそれにそなえて貯えなければならないが、それにしたって高が知れている。

それにしても、冬がないブラジルの海岸地帯のカイサーラ達が、働らかないで生きていける程度は卓絶している。

イグアッペから四十キロメートル北上したウナという部落で一夜の宿を借りたことがあるが、私が泊った最初の日にその家の主人がしたことは、しばらく姿を消して山に倒れていた丸太を三本曳いて来たことだけだった。

次の日に彼がしたことは、きわめて早朝に起きてその丸太を割って薪にすることだけだつた。八時頃にその仕

事が終ってあと丸一日、彼は窓から外を眺めたりハンモックに潜り込んだりして日を過した。
三日目に私は河を渡って旅を続けたが、彼はカヌーを漕いで対岸まで送ってくれた。私が岸に立って手を振っていると、彼は時に振向いて片手を挙げながら勢いよくカヌーを漕いでマングローブの茂みを曲って姿を消したが、多分、家に戻ったら私を送ったことで今日は充分に働いたと感じて、一日ボンヤリと過すに違いない、と思って可笑しかった。
彼と知り合って泊めてもらうようになったいきさつは、山径を私が歩いていると彼が後から来て二言三言、言葉を交して追い抜いて行った、たったそれだけのことだった。
パック・バッカー風の大荷物を背負ってアゴを出してノロノロ歩いている私を哀れむように見ながら、彼は、
「この山径を俺は三時間で歩く」
と自慢してスタスタと登って行ったのだった。そんな風に、私が五時間近くもかかった山径をケモノのように素速く歩く男が、家につくとボケッとして何にもしないのは不思議なくらいだった。
それなら山道だってもっとノロノロ歩いてもよさそうなものだ、と思ったりしたが、働かなければ怠け者だと考えるのは都会人の見方で、山径を急いで歩くことと、家でボケッとしていることとは矛盾してないのかもしれない。彼は決してナマケているのではなくて、何もしな

いで時間を過しているだけなのだから。そして、平和な、原型的な生活を維持しようとしたら、「何もしない」ということが第一に大切なことらしい。

連載６５

（４）

ジュキア河を遡っていくと．小川の流れ込みに小さな網が仕掛けてあった。ウキ代りの発泡スチルロールがピクピクと動いている。魚がかかっているのだ。

私がそのウキの上下動を眺めていると、岩雄さんがカヌーを寄せてくれた。手を延して網をつかむと激しい動きが手に伝わった。上げてみると、四十センチぐらいの丸々と肥ったタライーラが掛っていた。

そのまま網を沈めてカヌーは進む。

十分くらい遡ると、河岸に小さな小屋があった。男が岸に座って煙草をふかしていた。

「オーイ、下の網に魚がかかっているぞ」

「ありがとう」

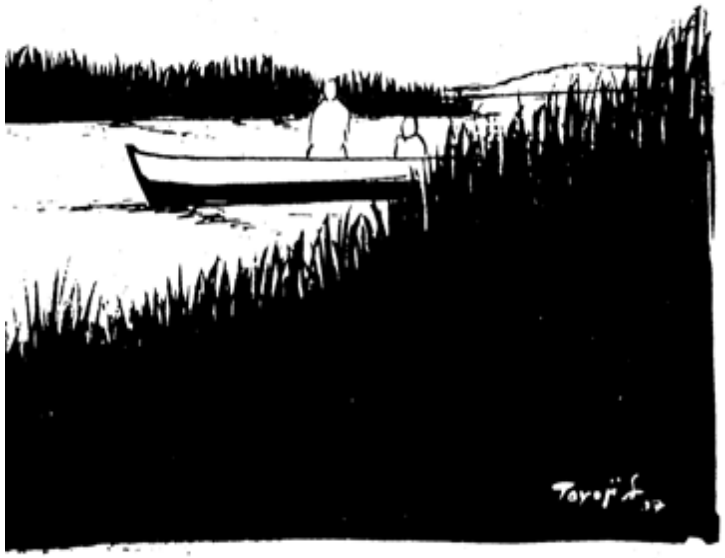
岩雄さんと男がそんなやりとりをしながら、舟は進んだ。

アシのようなペリーが河岸に密生している。

その中から褐色の鳥が飛びたつ。何か動物がいるらしくガサガサと音が立つこともある。黒い蛇がくねくねと河を渡っていった。

鋭い声、のどかな声……いつの間にか鳥たちの鳴き声

が多くなった。セキレイに似た水辺の鳥が多い。
だいぶ時間がたったので、舟底に当る尻が少し痛くなった。こんもりと砂が盛り上がっている処があったので、カヌーをつけてもらって一休みする。
煙草を一服して出発。
やがて左側に十メートルはどの巾の沼のようなものが見えた。
「これがキロンボ河の入口だよ」
と岩雄さんが教えてくれた。
この辺は一面の湿地帯で、ジュキア河の一キロメートルほど先にラゴア・ド、ミモゾという大きな沼がある筈だった。
私がそのことを言うと、
「そこにはタライラやカラーが沢山いる」
と岩雄さんが言った。
更に一ｋｍほど大曲りに添って遡ると、左側の森がパクッと割れていた。七、八メートルほどの幅の支流が流れ込んでいた。それが目指すイピランガ河だった。キロンボ河とイピランガ河に沿った上流の山一帯が、かつては海興のセッチ・バラス植民地だったのだ。



桂植民地という名がイグアッペ郡会の承認を得た正式の命名であったのに、その名は消えてジプブーラという旧名しか残っていないように、イピランガ河の上流にもセッチ・バラス植民地という名は残っていない。地図にはただ「キロンボ」と記されているだけである。

連載６６

（４）

リベイラ河からジュキア河へ……、そして更にイピランガ河へ入ると河幅はすっかり狭くなってしまった。河はくねくねと曲っている。うしろでカジをとる岩雄さんの目がきつくなった。じっと前方を見つめ・倒木や河面におおった枝を油断なく確かめながらカヌーを進めている。もうスピードを出せなかった。大曲りに倒木があったりすると、ほとんど停りそうにスピードを落してギリギリに舟体を滑り込ませて遡上して行くのだった。

両岸は木よりもペリーなどの水性植物が多くなった。水鳥も多い。尻振りダンスを踊るようにカヌーはグルグル廻りながら遡っ

た。イピランガ河は迷路のように複雑に曲りくねって明るい湿原の中を流れていた。
大きく右に曲る。すぐ左に曲る。三十メートルほど先の水は水草に呑まれているように見える。近ずくと河が急角度に曲っているのだった。昨夜雨が降ったのでいくらか増水しているらしく、薄にごりの水がかなりの速さで流れている。ふつうならこの辺まで来れば底まで見えるほど澄んでいるにちがいない。
河は細くなり、倒木が多くなり遡行はだんだんむずかしくなった。船外機のスクリューをあげ、棹で押したり、頭上の枝をつかんで引いたりしないと通れないような曲り角をいくつも過ぎた。イピランガ河に入ってから人家は一軒もなかった。
行事に小高い丘が見えた。パラナピアカバ山脈の一支脈のセーラ・ダ・ボアビスタの突出部なのだ。舟はようやく、丘のふもとに辿りついた。
丘のふもとの岩に当った水流がよどんで、やや広い淵になっている。淵の上流を眺めると、大岩が水中に顔を出し、奔流が走り、渓流の様相が加わっていた。
「これから上は行けないな」
岩雄さんが、あきらめたように言った。
言われるまでもなく、カヌーの大きさと川巾の狭さを見較べて、遡上が無理なのは私にも分っていた。
「ここでいいですよ」
と答えた。

時計をみると十時半だった。急に腹が減った。
「上陸して昼めしにしましょうか」
淵の横は狭い草原になっていた。イピランガ河に入ってから、上陸できるような処はここが最初だった。

連載６７

（４）

舟をもやって私たちは草原に上った。
私はパンと水を出した。岩雄さんが大きな布包みをほどくと、ニギリメシやトリの唐湯げが重箱にギッシリ詰っていた。私の分の弁当まで持って来てくれたのだ。クーラーにはコカコラも入っていた。
食べる前に、私は旅行用の釣具を出してルアー（疑似餌）をセットした。魚を釣って塩焼きにしようと思ったのだった。
目のまえの淵に投げてゆっくり引くとコツンと当りがあって魚が掛った。二十センチほどの銀色の魚が身をくねらせて上ってきた。この辺でタジボコ、サントス辺でタバジャーと呼ばれる、カマスのような魚だった。小骨は多いが塩焼きな

らわりに旨い。しかし、ちょっと小さい。その魚を放してまたルアーを投げると、おなじ大きさのタジボコが釣れた。

四、五匹釣ったがどれも同じくらいの大きさだった。魚の塩焼きはあきらめて、私は岩雄さんと並んで坐ってニギリメシを頬張った。

ブヨがうるさくまとい付く。手と顔を洗って汗を流すと、ブヨの来方は少しすくなくなった。

ジュキア河の中流あたりからこちらには人家はない。舟にも会わなかった。私はずっと岩雄さんと二人きりだった。

岩雄さんはボソボソとした話し方をする。ブラジル育ちだが、ちゃんとした日本語だった。その岩雄さんの声と鳥の声が半々に混って聞える。

丘の中腹に一軒家が見えた。

昼食を終えて、私は一人で丘に登った。木におおわれて直射日光の射さぬ径は、昨夜の雨にぬれている。ゴムの半長靴を用意していたので、ヘビの心配もなく細径を登った。ヘビにやられるのは、普通、クルブシとスネである。統計では三〇％くらいは手を噛まれているが、これは野良仕事をするためである。枯れ木をどけたりする時やられる。ただ歩くだけなら、下半身を保護すればヘビに噛まれる心配はまずない。頭部を噛まれたのは統計では〇・三％くらいだから、まあ無視していい数字だ。

ただ時として木の枝のヘビと遭遇することがある。以前、森の中でミドリ色のヘビとぶつかりそうになったことがある。はじめ木の葉に目がついているような感じだったが、すぐヘビだと気付いた。ヘビの目と私の目と向じ高さで五十センチくらいの至近距離だった。

あのときはさすがに冷汗がでた。しかし、それ以後、地を這っているヘビはさして怖くなくなった。

連載６８

（４）

この河のずっと下流の海に近い処で土地の娘に道案内をしてもらったことがあるが、バナナ畑の細径を抜けていると行手にヘビの太い胴が径を横切っていた。

「ヘビ！」

私は低く叫んで、心もち両手をひらいて立ち停った。先を行く娘がキャッと叫んで私にしがみついたら、なるべく効果的に抱きとめる用意だった。

ところが彼女は、

「オッパ！」

とかなんとか言っただけで、ヒョイとヘビの胴を飛び越してしまった。振り向いて、

「ベンカー（おいで）」

と言う。
私が飛び越そうとすると、ヘビがズルズルと動いた。私は、「キャッ」と叫んで娘にしがみついたのだった（ああ、みっともない）。

…林を抜けると、一軒家までは平原だった。私はズボンの下部をフックでとめた。自然の中にはいろいろの障害がある。私の服装もそれに備えて色々の仕掛けをしてある。叢を十メートルほど歩いてから、立ちどまってズボンを点検した。カラパタ（ダニ）がついていないか調べたのだった。草の葉のうらにはよくカラパタが棲む。動物が歩くとワラワラとたかるのだった。
幸い、カラパタはついでいなかった。普通、こんな場所で牛だの馬だのが飼われていると、たいがいカラパタがいる。この草原は馬も牛も通らないらしい。
一軒家の前で、私は案内を乞うた。応えはなかった。表戸は閉じられている。裏へまわった。裏には戸がないので家の中が見える。無人だった。荒れていた。
天井を見上げて、シャーガス氏病を持つバルベイロという虫（つつが虫）がいそうかどうか見定め、それから床に片足をかけてノミがいるかどうかも調べてから、私は家の中へ入った。
こう書くと私がいやに慎重のようだが、床が板の空き家には時としてノミが異常繁殖する。私はそういう家に入ってヒドイ目に逢ったことがある。アリの巣に足を踏

み込んだように、ズボンが真っ黒になるほど小さな虫が這い上ってくる。はじめはなんの虫かわからなかったが、その全てがノミだと気付いたとき、卒倒しそうになった。

狂ったように外へ飛びだし、着ているものを全部脱いでノミを振いおとした。靴の中までノミがいるのだった。白昼、戸外で素裸になって服を振りまわしながら走り廻るのは、非常にカッコ悪い。しかし、千匹以上のノミにたかられたらそれ以外に方法はない。

経験のない人は私が誇張して書いていると思うだろうが、私に似た経験をした人は案外に多いのである。そういう人々は例外なく微笑しながら私の話を本当だといってくれる。

連載69

（4）

無人の廃屋の窓によると、眼下に森と湿地帯が展けていた。たかだか三十メートルくらいしか登らないのに、平坦な森は遠くまで望めた。

イピランガ河の流れに沿って視線を上流へ移すと、そちらには山地が隆起していて遠くまでは見通せなかった。目算で、五キロほど上流の山脈

を私は眺めた。その辺に田端や加山たちが入植した筈だった。

すっぽりと森が重なっているだけで、視界には一軒の人家もなかった。加山がやがて移り住んだと思われる更に上流地帯は視界にすら入らなかった。

上へ登ればもっと遠くが見えるかもしれないと思って、私は廃屋を出て坂を登っていった。

加山はまだ生きているだろうか？　と私は思った。生きているとしても、加山もイラセマも老人に近いだろう。山の住人は老けるのが早い。

彼は一生を満足して過しただろうか？

髪に白いものが混った田端はサンパウロ市で社会的地位を得て、忙しい忙しいとボヤキながら日を送っている。この旅にも同行したいといいながら、結局、仕事が手離せなくて来られなかった。田端はあれ以来一度もキロンボを訪れていないという。従って加山の、その後の消息も知らなかった。

私は何とかして加山に逢ってみたいと思ったのだが、このカヌーでは無理だった。

坂を登っているうちに草原が尽きて林になった。もう径はなかった。ヤブを分けながら私はしばらく進んだが、いくら進んでも視界の広けた場所はなさそうだった。私は進むことをあきらめた。

私は立ち停った。

森の中に私はいた。樹の声がした。風の渡る音ではな

かった。樹が一種の音波を発しているのだった。そういう感覚にとり巻かれるのは、私にとってさほど珍しい経験ではない。しばしば、樹が喋っていると感じることがある。

私は立ち停って、樹の声の中に佇んでいた。砂浜や磯の岩の中に独りでいると淋しいが、樹の中にいると淋しくなかった　なにか、森には生物に語りかけ、命じる力がある。森のエーテルの作用ではないか、と私は漠然と思っているが、加山はそういう声を聞く感覚を人一倍持っていたのではなかったろうか。

その声に耳をかたむけ従うことを、我々はふつう「退行現象」と呼んでいる。つまり、無欲な田舎者になることだ。

連載７０

（４）

しかし、果して、これは「退行」だろうか？　森の一員として生きることが退行だろうか？　森は「無欲になれ」と命じ続けている。その声を聞き分けられる人は、鳥やケモノや魚たちと平和に共存して生きるタイプの森の住人になる。キロンボに入った入植者たちは森に集団催眠術をかけられたように、多かれ少なかれ退行したのだった　ここを開拓し理想の地を樹立しようとした青柳郁太郎の意図とはまったく別の、森の声に支配された生活をある期間送ったのだった。

青柳と共に乗り込んで来た一群の人の一人に北島医師がいた。彼は人にしたわれ、医師として充実した生活を送った。最後はジュキア線のマラリア患者を診察に行き、自分もマラリアにかかって死んだが、熱心なクリスチャンだった。

北島医師が死ぬとき、枕許に子供達を集め、「人間は万物の霊長ではない、という認識に自分は達した。このことを忘れるな」と言い遺した。

神の創られたものとしての人間を生物の中心におくキリスト教の教義とはちがうことを彼は明言して死んだのだった。

最後まで熱烈なクリスチャンであったが、その思想は異端へと一歩ふみ込んでいた。

北島医師も「森の声」を聞いた一人だった、と信じない訳にはいかない。人間だけが生物ではないと森は語り続けている。

普通、人類学者は文化適応は長い選択の結果、到達したものだと説明するが、キロンボ植民地の加山のように数年で適応が進むこともあるのだ。その現象を「退行」と呼ぶより、私はむしろ「強制適応」とでも名付けたい。森の声が人間

に向って強制するのである。
とまれ、桂植民地、レジストロ植民地、セッチ・バラス植民地の三つの植民地、つまりイグアッペ植民地にかって入った日本人の大半は他へ転出してしまったが、土地に古くから住む森の住人たちと接触し、交わった。
森の住人たちの人の好さや無欲に強い印象をうけながら、この地を去ったのだった。
いろいろな夢を持って人々は森を拓こうとする。しかし、結果は予測しがたい。平野植民地のように困難と闘いながら成功した処もある。イグアッペ植民地のように、困難の度合いが少ないのに森に服従した処もある。「人間は万物の霊長ではない」という北島医師の遺言は開拓者が到達した結論の一つの姿を示している。

連載71

（4）

私は来た径を戻って丘を降りた。これ以上遡れないのは残念だが、ここ迄来たことで充分のような気もしていた。
加山を探しあてて、その話を聞きたい気はあった。田畑と別れたその後の人生がどんなものだったか聞きたかった。が、もっと大掛りた準備をして数日山の中に泊る予定でないと無理だった。アメリカ大統領のジミー・カーターの親類にやはり、この奥に移住して、後にアメリカーナへ移った南部人がいたそうだ。カーター氏は議

員時代にアメリカーナに墓参に来た。
加山が恋したイラセマという娘はひょっとするとジミー・カーターの親類の血をうけているのではないか、などと私は空想しながら河までくだった。
「帰りましょう」
私はカヌーに坐って待っていてくれた岩雄さんに声をかけて、舟に乗った。
来たときのように、倒木を避けながらカヌーはゆっくり流れを降った。
いつの間にか陽が傾いていた。
「どこか、ほかに見たい処はあるかね」
岩雄さんが訊ねた。
「時間があったらミモーゾの沼を見たいけど」
私が言うと、彼はうなずいた。
イピランガ河が終り、ジュキア河に合流するとカヌーはずっと速く進んだ。キロンボ河の合流点のよどみに入り、しばらく遡ると左手に細い小径が草に半ばおおわれて光っていた。
棹で押しながらカヌーを進めるとポッカリと行く手が開いて、夢のように美しい沼があった。
小鳥たちが舞い、小魚が跳ね、青い水草の花が一面に咲き誇っていた。タライーラが重々しく跳ねた。静かだった。棹がカヌーの側面に当る音だけが沼面に響いた。
沼を一周して、カヌーは再び河へ出た。果てしなく曲りくねれながら、黒い水のジュキア河は森の中を流れる。

広々したリベイラ河へ入るとカヌーはにわかに小さくなったような感じだった。単調な降りが続く。両側はバナナ園だった。

レジストロに近ずく頃、日はとっぷり暮れた。今朝船出した真っ暗な砂浜にカヌーが乗れ上げ、エンジンが停ったとき、一つの旅がこれで終つたという実感が私の胸にこみ上げてきた。

（「森の夢」第二部、終り）

（筆者注・これは１９７７年の取材ノートを小説風に纏めたものです。いまでは忘れられたことも記されています。「森の夢」第三部は『超積乱雲』無明舎刊です）